

令和2年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—令和2年度国庫補助事業—

令和3年（2021年）3月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査は全国的に減少傾向にあるのに対し、本市では緩やかながら増加しています。

本書は、令和2年度に実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書です。これら一つひとつを積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

令和3年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 岡田祐一

例 言

1. 本書は、令和2年度国宝重要文化財等保存・活用事業費市内遺跡発掘調査等事業（総額6,700,000円の内、国庫3,350,000円、市費3,350,000円）として実施した個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。令和2年度として、令和2年4月1日から令和3年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から令和元年1月から令和2年12月末までに発掘調査を終了したものを対象に報告する。
2. 調査の実施は、本市教育委員会歴史文化財課調査管理係職員木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史があたり、阿部ともよ、川西宏実、川畑康雄がこれを補助した。
3. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、正岡が編集にあたった。
4. 遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書で使用する標高はT.P.（東京湾標準海水面）で表記する。各挿図に掲載する表記の内、M.N.は磁北を示し、表記のないものは国土座標系〔第VI系〕に基づく座標北を示す。
2. 挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版標準土色帖』（2014年版）に基づく。また、地層の粒度の記載に関しては、基本的にWentworth（1922）の区分を使用した。
3. 遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器・石製品の断面は白抜き、須恵器は黒塗り、瓦器・瓦質土器の断面はアミカケで示した。
4. 本書における遺構、遺物の時期決定には主に以下の文献を参考とした。
森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』真陽社
古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』真陽社
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究』京都編集工房
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
菅原正明 1987「畿内における土釜の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

本文目次

序文	第2節 上中条遺跡・春日遺跡	8
明言・凡例	第3節 牟礼遺跡	11
目次	第4節 玉櫛遺跡	13
第1章 地理・歴史的環境	第5節 東京良遺跡	17
第1節 地理的環境	第6節 鮎川遺跡	30
第2節 歴史的環境	第7節 太田茶臼山古墳陪塚群	32
第2章 令和2年度調査地一覧	第8節 宿久庄遺跡	33
第3章 調査の成果	写真図版	
第1節 茨木遺跡	抄録・奥付	

挿図目次

図1 茨木市地質図	1	図28 平・断面図(東京良遺跡2020-1)	18
図2 令和2年度発掘調査地位位置図	4	図29 出土遺物(東京良遺跡2020-1)	19
図3 茨木遺跡調査地位位置図(1)	5	図30 平・断面図(東京良遺跡2020-2)	19
図4 調査区配置図(茨木遺跡2020-2)	6	図31 1主体部 検出状況平面図	20
図5 平・断面図(茨木遺跡2020-2)	6	図32 1主体部 平・断面図	21
図6 茨木遺跡調査地位位置図(2)	7	図33 出土遺物(1)(東京良遺跡2020-2)	22
図7 調査区配置図(茨木遺跡2020-4)	7	図34 出土遺物(2)(東京良遺跡2020-2)	22
図8 平・断面図(茨木遺跡2020-4)	7	図35 出土遺物(3)(東京良遺跡2020-2)	23
図9 上中条遺跡・春日遺跡調査地位位置図	8	図36 平・断面図・出土遺物(東京良遺跡2020-5)	25
図10 調査区配置図(上中条遺跡2019-2)	8	図37 調査区配置図(東京良遺跡2020-4)	26
図11 平・断面図(上中条遺跡2019-2)	9	図38 平・断面図・出土遺物(東京良遺跡2020-4)	26
図12 断面柱状図(春日遺跡2020-1)	9	図39 調査区配置図(東京良遺跡2020-7)	27
図13 調査区配置図(春日遺跡2020-2)	10	図40 平・断面図(東京良遺跡2020-7)	27
図14 平・断面図(春日遺跡2020-2)	10	図41 東京良遺跡調査地位位置図(2)	28
図15 牟礼遺跡調査地位位置図	11	図42 調査区配置図(東京良遺跡2020-8)	28
図16 断面柱状図・出土遺物(牟礼遺跡2019-5)	12	図43 平・断面図・出土遺物(東京良遺跡2020-8)	29
図17 調査区配置図(牟礼遺跡2020-2)	12	図44 鮎川遺跡調査地位位置図	30
図18 平・断面図(牟礼遺跡2020-2)	12	図45 調査区配置図(鮎川遺跡2020-1)	30
図19 玉櫛遺跡調査地位位置図	13	図46 平・断面図(鮎川遺跡2020-1)	31
図20 調査区配置図(玉櫛遺跡)	13	図47 出土遺物(鮎川遺跡2020-1)	31
図21 平・断面図(玉櫛遺跡2019-1)	14	図48 太田茶臼山古墳陪塚群調査地位位置図	32
図22 平・断面図・出土遺物(玉櫛遺跡2019-2)	14	図49 調査区配置図(太田茶臼山古墳陪塚群2020-1)	32
図23 平・断面図・出土遺物(玉櫛遺跡2020-2)	15	図50 平・断面図(太田茶臼山古墳陪塚群2020-1)	33
図24 調査区配置図(玉櫛遺跡2020-1)	16	図51 宿久庄遺跡調査地位位置図	33
図25 平・断面図(玉櫛遺跡2020-1)	16	図52 調査区配置図(宿久庄遺跡2020-2)	34
図26 東京良遺跡調査地位位置図(1)	17	図53 平・断面図・出土遺物(宿久庄遺跡2020-2)	34
図27 調査区配置図(東京良遺跡)	18		

写真図版目次

図版1 茨木遺跡・上中条遺跡	図版5 東京良遺跡	図版9 東京良遺跡
図版2 春日遺跡	図版6 東京良遺跡	図版10 東京良遺跡
図版3 牟礼遺跡・玉櫛遺跡	図版7 東京良遺跡	図版11 東京良遺跡
図版4 玉櫛遺跡	図版8 東京良遺跡	図版12 鮎川遺跡・太田茶臼山古墳陪塚群・宿久庄遺跡

第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、南北17.05km、東西10.07kmと南北に長く、東西に短い形で市域を形成しており、北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町に接している。市域は、北東-南西方向に走る有馬-高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北半部はおおむね標高300m前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南半部は、西側に標高50～100m前後の前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成された千里丘陵が南北に伸び、東側に北摂山地を源とする安威川・佐保川・茨木川等によって形成された沖積層からなる三島平野が広がっている。

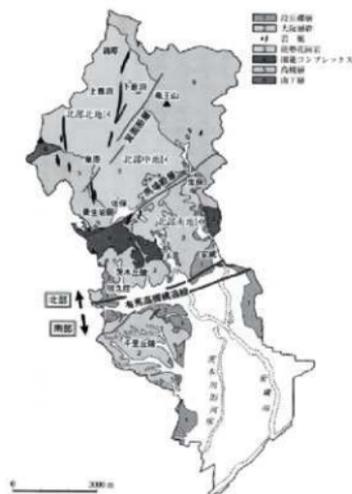


図1 茨木市地質図(木原 2012)

第2節 歴史的環境

ここでは、茨木市域における遺跡の分布やその内容を中心に、各時代の概要を時代順に述べておく。

旧石器時代 周辺地域に比べて希薄ではあるものの、太田遺跡から国府型ナイフ形石器や剥片類が採集されているほか、宿久庄遺跡や郡遺跡、佐保川流域ではナイフ形石器や尖頭器等が確認されている。

縄文時代 中期～後期にかけて、千提寺南遺跡や西福井遺跡、初田遺跡等の山地から丘陵部に立地する遺跡において遺構や遺物が認められている。晩期には遺跡数が増加し、耳原遺跡や五日市東遺跡、総持寺遺跡等の段丘ないし段丘縁上部上のほか、牟礼遺跡や東奈良遺跡等の沖積平野上においても遺跡が出現するようになる。なお、耳原遺跡からは土器棺墓16基からなる墓域がみつまっている。

弥生時代 弥生時代になると遺跡数の増加が顕著になる。前期には東奈良遺跡、耳原遺跡、牟礼遺跡等の縄文晩期から続く遺跡のほかにも目垣遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡等に集落が形成される。なかでも、東奈良遺跡は環濠を幾重にもめぐらせた集落を形成しており、質・量ともに極めて豊富な遺構・遺物が確認される等、弥生時代を通じて突出した内容を示す遺跡である。なお、東奈良遺跡からは国の重要文化財に指定されている石製銅鐸鋳型、銅戈・ガラス製品の鋳型、送風管等の中期の鋳造関連遺物が出土しており、集落内に高い鋳造技術をもった集団が存在していたものと推測される。中期の遺跡は、主要河川の両岸や丘陵部にまで広がり、中条小学校遺跡や中河原遺跡、太田遺跡、溝咋遺跡、春日遺跡等が出現する。後期には宿久庄遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等においても集落が展開する。

古墳時代 古墳時代に入ると、市域各所で様々な古墳が築造されるようになる。前期には、紫金山古墳・將軍山古墳が相次いで築造される。ともに後円部に竪穴式石室を持つ全長100mを超す前方後円

墳である。中期になると、三島地域最大である太田茶白山古墳が造営される。全長226m、後円部径138mの前方後円墳であり、現在は宮内庁により「三嶋藍野陵」として治定されている。後期には山麓部から丘陵部を中心に、横穴式石室を主体とする青松塚古墳、南塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳等の単独墳が築造される一方で、安威古墳群、將軍山古墳群、新屋古墳群等の群集墳が認められる。また、丘陵部から沖積平野部を中心とした太田遺跡、総持寺遺跡、中条小学校遺跡、郡遺跡等の遺跡において埋没古墳群の存在が明らかとなっている。このほか、古墳時代の集落遺跡としては、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡、郡遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等が代表的な遺跡として挙げられる。安威遺跡からは朝鮮半島南部由来の遺物・遺構が多く出土しており、本市域における古墳時代集落の動態を考える上で極めて重要である。

古代 奈良時代に入ると、茨木市域は摂津国島下郡に編成される。平城遷都にともない、島下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮部から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。7世紀後半ごろには太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺等の寺院が建立され、太田廃寺からは、塔心礎とその内部に納められた舍利容器一具等が発見された。9世紀以降においても、総持寺や忍頂寺をはじめとする寺院が市域各地に建立される。また、いわゆる延喜式神名帳には島下郡に13社の神社が規定されており、そのうち10社が現在の茨木市域に所在している。都から大宰府へと向かう山陽道、難波方面へと向かう三島路が交わる地点にある茨木市域は、政治・文化・交通の要所であったといえる。

中世～近世 中世の遺跡としては、郡遺跡、東奈良遺跡、宿久庄遺跡、玉櫛遺跡、真砂遺跡等の集落遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。一方、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保宮などの城館跡がある。市域中心部に位置する茨木城は、城主の変遷によりその内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。このほか、国史跡に指定されている西国街道沿いに位置する郡山宿本陣は「椿の本陣」とも呼ばれ、江戸時代には西国大名たちの参勤交代にも利用された。また、市域北部の集落である千提寺・下音羽は、「聖フランシスコ・ザビエル像」をはじめとするキリシタン遺物がまぎらわしく発見された地として著名であり、高山右近の所領の時期にキリシタン信仰がもたらされたと考えられている。禁教令下の江戸時代を通じて密かに受け継がれてきたため、その存在が明らかになるのは20世紀に入ってからである。本市で継続的に調査を進めてきた千提寺菱ヶ谷遺跡や新神神高速道路建設工事に伴う一連の発掘調査およびキリシタン遺物等の研究成果をもとに、この地のキリシタン信仰への理解がさらに進むことが期待される。

〔引用文献〕

木庭元晴 2012『基盤地質』『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ 茨木市

〔参考文献〕

茨木市史編さん委員会 2012『新修 茨木市史』第一巻通史Ⅰ 茨木市

茨木市史編さん委員会 2014『新修 茨木市史』第七巻史料編考古 茨木市

茨木市教育委員会 1998『茨木の史跡』

茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』

公益財団法人大阪府文化財センター 2015『千提寺西遺跡 日奈戸遺跡 千提寺市販遺跡 千提寺クルス山遺跡』

第2章 令和2年度調査地一覧

※a～dは、令和2年1月～3月（令和元年度）に実施したものである。

No	遺跡名	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
a	上中条遺跡2019-2	上中条一丁目	2020/2/6	4㎡	正岡	土坑1基・小穴1基を検出。土師器片が出土。
b	玉柳遺跡2019-1	真砂一丁目	2020/2/13	6㎡	木村	土師器・瓦器・陶器片が出土。
c	玉柳遺跡2019-2	真砂一丁目	2020/2/14	6㎡	木村	土師器・瓦器片が出土。
d	牟礼遺跡2019-5	中村町	2020/3/24	6㎡	木村	土師器・瓦器片が出土。
1	東奈良遺跡2020-1	東奈良二丁目	2020/4/6	4㎡	正岡	溝2条・土坑1基・小穴2基を検出。弥生土器片が出土。
2	鮎川遺跡2020-1	鮎川二丁目	2020/4/10	5㎡	富田	ピット3基を検出。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器片が出土。
3	東奈良遺跡2020-2	東奈良二丁目	2020/4/22 ～ 2020/4/25	6.4㎡	正岡	木棺墓1基、周溝を1条検出。弥生土器・須恵器・瓦器・木製品が出土。
4	玉柳遺跡2020-1	水尾三丁目	2020/5/8	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
5	東奈良遺跡2020-4	沢良宜西二丁目	2020/6/8	6.25㎡	富田	土師器・瓦器片が出土。
6	春日遺跡2020-1	上穂積二丁目	2020/6/9	2㎡	坂田	遺構・遺物なし。
7	玉柳遺跡2020-2	真砂一丁目	2020/6/10	6㎡	木村	土師器・瓦器片が出土。
8	茨木遺跡2020-2	新庄町	2020/6/23	9㎡	正岡	土師器・須恵器・黒色土器片が出土。
9	東奈良遺跡2020-5	東奈良二丁目	2020/7/20	4㎡	正岡	溝1条を検出。弥生土器・瓦器片が出土。
10	春日遺跡2020-2	上穂東町	2020/9/10	5㎡	富田	ピット4基を検出。土師器・瓦器・陶器片が出土。
11	牟礼遺跡2020-2	中津町	2020/10/29	5㎡	木村	遺構・遺物なし。
12	太田茶臼山古墳階塚群2020-1	高田町	2020/10/30	4㎡	富田	須恵器片が出土。
13	東奈良遺跡2020-7	沢良宜西二丁目	2020/11/26	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
14	東奈良遺跡2020-8	奈良町	2020/12/7	3.9㎡	富田	溝1条・ピット4基を検出。土師器・黒色土器片が出土。
15	茨木遺跡2020-4	片桐町	2020/12/8	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
16	宿久庄遺跡2020-2	宿久庄三丁目	2020/12/21	6㎡	木村	土師器・須恵器片が出土。



図2 令和2年度発掘調査地位置図 (アルファベット・アラビア数字は調査No.と対応する)

第3章 調査の成果

第1節 茨木遺跡

1. 茨木遺跡 2020-2 (図3～5 図版1)

調査地 茨木市新庄町1742番

調査面積 9㎡

調査期間 令和2年6月23日

調査担当 正岡大実

はじめに 新庄町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地内に2×2.5 m (A区)と2×2 m (B区)の調査区をそれぞれ設定して調査を行った。計画地内の現況地盤面は西接する南北道路面から東方向に緩く傾斜しており、最大で0.4 m程度低い。

基本層序 調査地の基本層序は大別7層、細別13層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a層)、1層：近世～近代に形成されたと目される耕作土層 (1-1a層)、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層 (2-1a層)、3層：中世以前の耕作土層 (3-1a・3-2a層)、4層：平安時代以後の耕作土層と淘汰の良い水成層から構成される地層 (4-1a～4-4b層)、5層：平安時代以前の土壌層準 (5-1a・5-2a層)、6層：平安時代以前の土壌層準と淘汰の良い水成層から構成される地層 (6-1a・6-2b層)の順に堆積が認められた。5層以下の層準については、調和的に乱れる変形構造が顕著に認められる点が特徴である。



図3 茨木遺跡調査地位位置図 (1)

第3章 調査の成果

遺構・遺物 調査では、断面観察の結果、層界の明瞭な2-1a層下面(B区)、4-3a層下面(A区)、6-1a層下面(A区)の3面について平面的な調査を実施したが、遺構は検出できなかった。なお、出土遺物としてはA区の2層から土師器片が出土したほか、4層からは土師器・須恵器・黒色土器片が出土した。いずれも細片のため図示はし得なかったが、2～4層は、古代末～中世にかけての遺物が含まれることが明らかとなった。

まとめ 今回の調査地は、複数時期の遺構面が確認されている新庄遺跡に近接している。調査では遺構は確認できなかったが、地層の確認に加え細片ながらも遺物が出土したことで、各地層の時期比定に関して新たな知見を加えることができた。

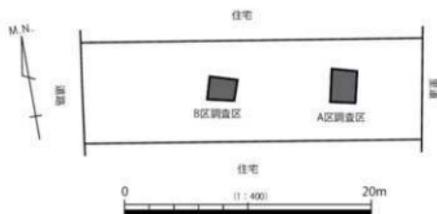
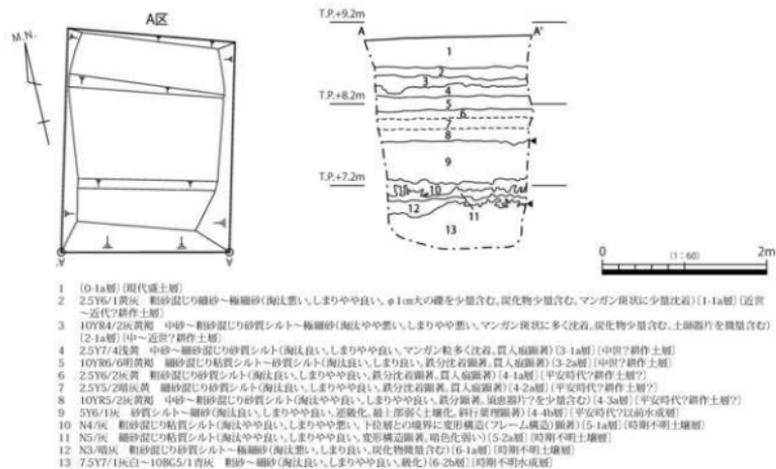
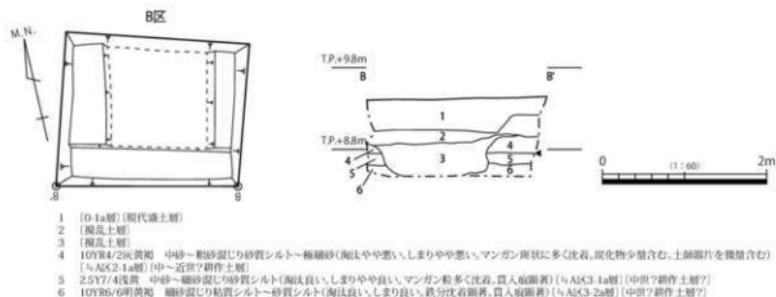


図4 調査区配置図(茨木遺跡 2020-2)



- 1 [0-1a層] [現代盛土層]
- 2 5Y6/1黄灰 粗砂混じり細砂→極細砂(陶法悪い、しまりやや良い、φ1mm大の礫を少量含む、炭化物少量含む、マンガン痕状に少量比着) [1-1a層] [近世～近代?耕作土層]
- 3 10YR4/2灰黄 中砂→粗砂混じり砂質シルト→極細砂(陶法やや悪い、しまりやや悪い、マンガン痕状に多く比着、炭化物少量含む、土師器片を微量含む) [2-1a層] [中～近世?耕作土層]
- 4 2.5Y7/4黄 中砂→粗砂混じり砂質シルト(陶法良い、しまりやや良い、マンガン粒多く比着、貫入痕顕著) [3-1a層] [中世?耕作土層]
- 5 10YR6/6明黄 粗砂混じり粘質シルト→砂質シルト(陶法良い、しまり良い、鉄分比着顕著、貫入痕顕著) [3-2a層] [中世?耕作土層]
- 6 2.5Y6/2灰黄 粗砂混じり砂質シルト(陶法良い、しまりやや良い、鉄分比着顕著、貫入痕顕著) [4-1a層] [平安時代?耕作土層?]
- 7 2.5Y5/2明灰黄 粗砂混じり砂質シルト(陶法良い、しまりやや良い、鉄分比着顕著、貫入痕顕著) [4-2a層] [平安時代?耕作土層?]
- 8 10YR5/2灰黄 中砂→粗砂混じり粘質シルト(陶法やや良い、しまりやや良い、鉄分比着、炭化物少量含む) [4-3a層] [平安時代?耕作土層?]
- 9 5Y6/1灰 粘質シルト→細砂(陶法良い、しまりやや良い、差酸化、筋上部弱く土壌化、斜行渠理顕著) [4-4b層] [平安時代?は給水成層]
- 10 N4/6 粗砂混じり粘質シルト(陶法やや悪い、しまりやや悪い、ト粒層との境界に変形構造(フレイム構造)顕著) [5-1a層] [時期不明土壌層]
- 11 N5/灰 粗砂混じり粘質シルト(陶法やや良い、しまりやや良い、変形構造顕著、暗色化強い) [5-2a層] [時期不明土壌層]
- 12 N3/明灰 粗砂混じり砂質シルト→極細砂(陶法悪い、しまり良い、炭化物少量含む) [6-1a層] [時期不明土壌層]
- 13 7.5Y7/1灰白→10R6.5/1黄灰 粗砂→細砂(陶法良い、しまりやや良い、酸化) [6-2a層] [時期不明土壌層]



- 1 [0-1a層] [現代盛土層]
- 2 [2a層土層]
- 3 [3a層土層]
- 4 10YR4/2灰黄 中砂→粗砂混じり砂質シルト→極細砂(陶法やや悪い、しまりやや悪い、マンガン痕状に多く比着、炭化物少量含む、土師器片を微量含む) [4-3a層] [中～近世?耕作土層]
- 5 AS2/1a黄 中砂→粗砂混じり砂質シルト(陶法良い、しまりやや良い、マンガン粒多く比着、貫入痕顕著) [4-AS3-1a層] [中世?耕作土層?]
- 6 10YR6/6明黄 粗砂混じり粘質シルト→砂質シルト(陶法良い、しまり良い、鉄分比着顕著、貫入痕顕著) [4-AS3-2a層] [中世?耕作土層?]

図5 平・断面図(茨木遺跡 2020-2)

2. 茨木遺跡 2020-4 (図6～8 図版1)

調査地 片桐町1120番13

調査期間 令和2年12月8日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明



図6 茨木遺跡調査地位置図(2)

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面とほぼ同じであり、西側の元茨木川堤防より約2 m低い。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層に区分でき、上層から0層:現代盛土層(0-1a層)、1層:現代耕作土層(1-1a層)、2層:水成層(2-1b層)、3層:淘汰の良い水成層(3-1b～3-5b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査の結果、遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 平成29年度に今回の調査地の南側で実施した確認調査でも遺構・遺物は確認できなかった。冒頭に述べたように、本調査地点は元茨木川に隣接する地点であるが、渠理構造の発達した流路充填堆積物に類する地層は確認されなかった。2層以下の連続する水成層の存在も踏まえ、元茨木川による影響の有無についても確認していく必要がある。

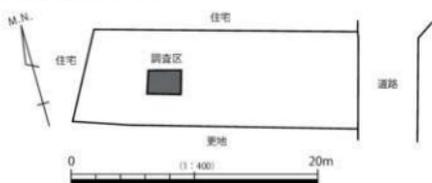


図7 調査区配置図(茨木遺跡 2020-4)

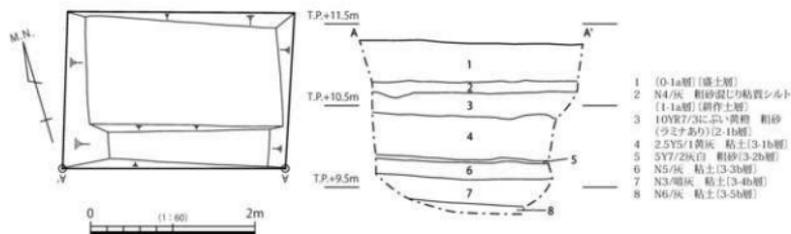


図8 平・断面図(茨木遺跡 2020-4)

第2節 上中条遺跡・春日遺跡

1. 上中条遺跡 2019-2 (図9~11 図版1)

調査地 上中条一丁目82番4

調査面積 4㎡

調査期間 令和2年2月6日

調査担当 正岡大実

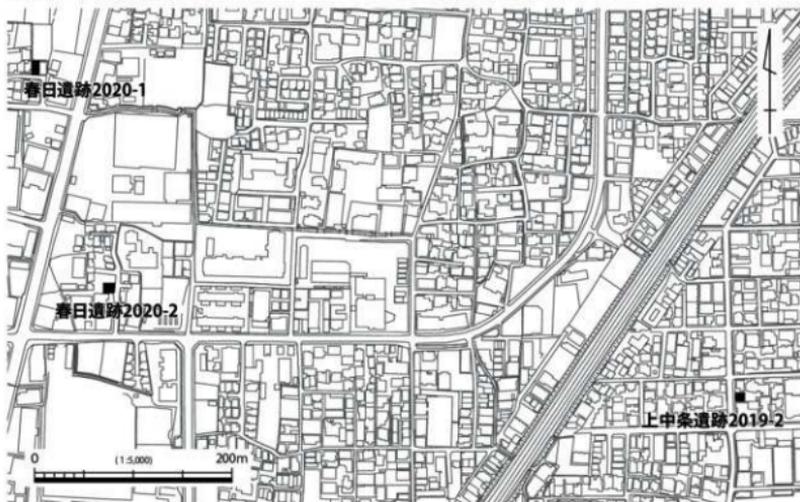


図9 上中条遺跡・春日遺跡調査地位置図

はじめに 上中条一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路面よりも約0.2 m高く、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層(0-1a・0-2a層)、1層：中～近世に形成されたと目される耕作土層(1-1a～1-3a層)、2層：中世に形成されたと目される耕作土層(2-1a・2-2a層)、3層：遺物を微量含む耕作土層(3-1a・3-2a層)、4層：淘汰の良い水成層(4-1b～4-3b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 3層下面で遺構検出を行った結果、土坑と小穴をそれぞれ1基確認した。これらの遺構は、断面観察の結果、いずれも3層を起源とする土壌が三日月状に入り込むほか、掘方の断面形状も不明瞭であることから、3層堆積後に形成された土坑状変形等の変形構造である可能性が高い。なお、3層中からは土師器片が出土しているが、細片であるため時期の特定には至らなかった。

まとめ 今回の調査で確認した4層は、上方細粒化する河川性の水成堆積物とみられる。今回は本層準の層厚が極めて厚く、調査地も狭小であったため下位層の様相把握は成し得なかったが、さらに古

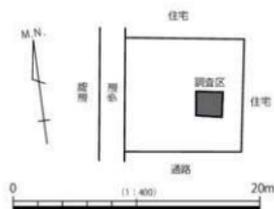


図10 調査区配置図

(上中条遺跡 2019-2)

い遺構面を確認できる可能性もある。下位に位置する層準の様相把握は今後の課題である。

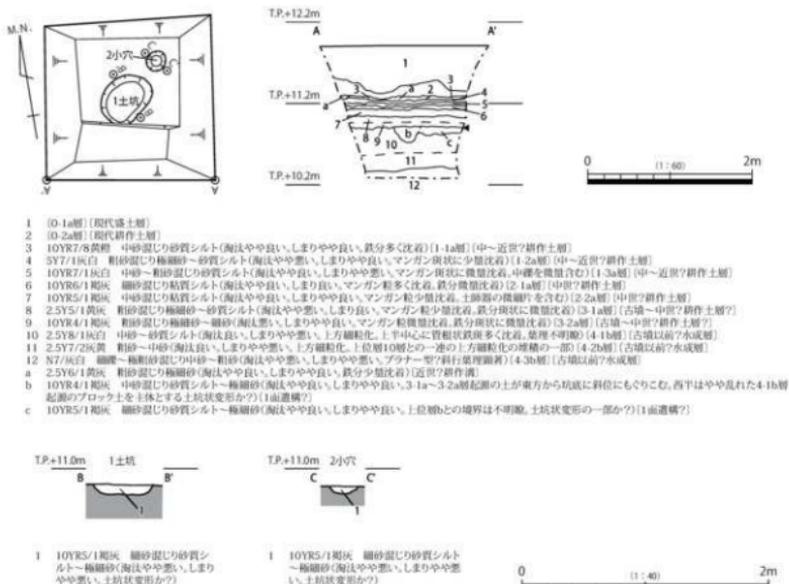


図 11 平・断面図 (上中条遺跡 2019-2)

2. 春日遺跡 2020-1 (図 9・12)

調査地 上穂積二丁目99番13

調査期間 令和2年6月9日

はじめに 上穂積二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、1×2mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南面する道路面から約1.5m高く、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別2層、細別4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a～0-3a層)、1層：近～現代に形成された目される耕作土層(1-1a層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査の結果、遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 本調査地では、敷地面積が狭小であったため十分な調査面積の確保が困難な状況下で調査を実施せざるを得なかった。遺構・遺物が確認できなかったことも、そのことに起因しているものと考えられることから、周辺の調査時にはさらに下位の層準の様子に注意を払う必要がある。

調査面積 2㎡

調査担当 坂田典彦

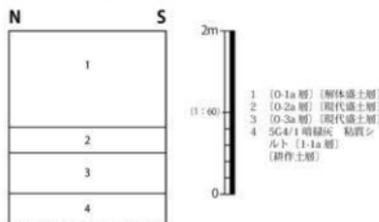


図 12 断面柱状図

(春日遺跡 2020-1)

3. 春日遺跡 2020-2 (図9・13・14 図版2)

調査地 上穂東町134番3

調査面積 5㎡

調査期間 令和2年9月10日

調査担当 富田卓見

はじめに 上穂東町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：中～近世耕作土層(1-1a～1-3a層)、2層：遺物を含む土壌層(2-1a層)、3層：ベース土層(3-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 2層下面においてピット4基を検出した。いずれも2層よりはやや黒色味の強い土壌をベースとする埋土であり、基底面遺構として捉えるべき遺構と考えられる。遺物は2-1a層から土師器・瓦器・陶器といった中世の遺物が出土したほか、1ピットからは土師器が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

まとめ 出土遺物が細片のため遺構の詳細な帰属時期は不明であるが、遺物包含層とその下面において遺構が良好に遺存することを確認した。断片的な成果ではあるが、重要な知見を加えることができた。

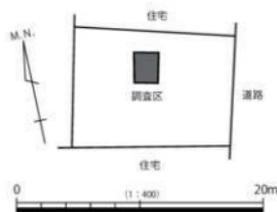


図13 調査区配置図
(春日遺跡 2020-2)

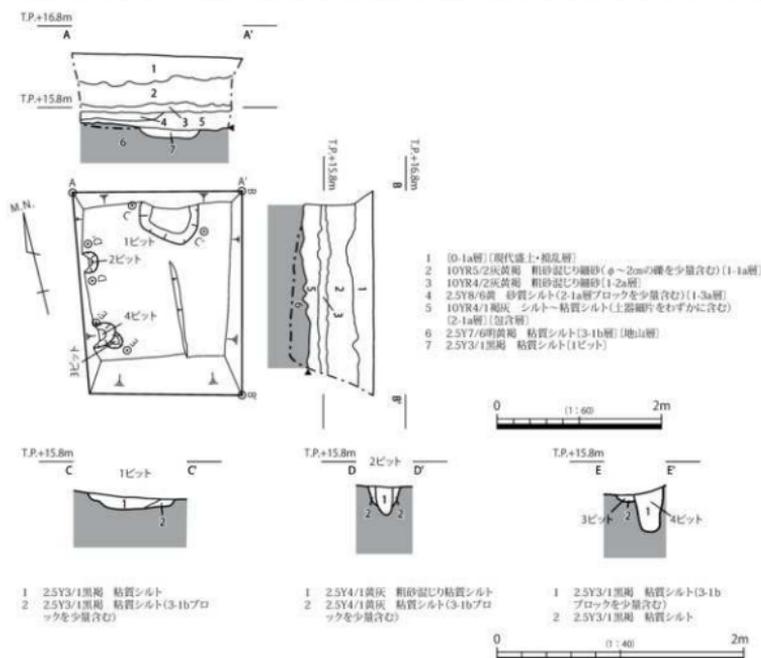


図14 平・断面図 (春日遺跡 2020-2)

第3節 牟礼遺跡

1. 牟礼遺跡 2019-5 (図 15・16 図版3)

調査地	中村町507番1の一部、507番5、508番2の一部	調査面積	6㎡
調査期間	令和2年3月24日	調査担当	木村健明

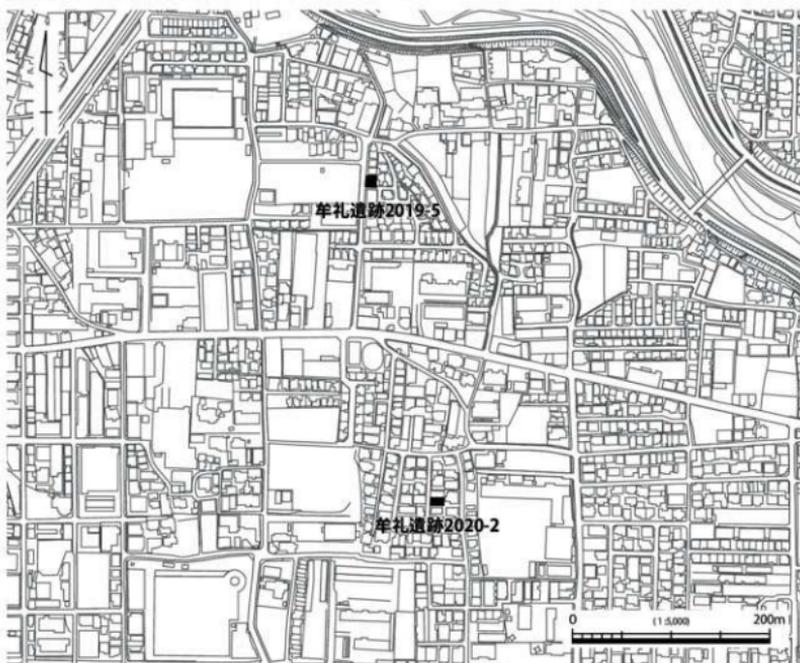


図 15 牟礼遺跡調査地位置図

はじめに 中村町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：耕作土層（1-1a層）、2層：やや淘汰の悪い粗粒の水成層（2-1b～2-5b層）、3層：淘汰の良い水成層（3-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構は検出できなかったが、2-5b層中から中世の土師器皿及び瓦器椀片が出土した。このうち、かろうじて図示可能なものとして瓦器椀（1）を図16に掲げた。1は炭素の吸着が悪く灰白色を呈しており、口縁端部は緩く外反する。小片のため詳細な時期は明らかにし難いが、概ね13世紀末～14世紀前葉の所産であろうか。

まとめ 遺構は確認できなかったが、中世の遺物を確認したことによって2層とした氾濫堆積物の

帰属時期を推定する手がかりを得ることができた。牟礼遺跡周辺の地形環境と遺跡の形成過程を検討する上で重要な成果を得ることができたものと言える。



図 16 断面柱状図・出土遺物 (牟礼遺跡 2019-5)

2. 牟礼遺跡 2020-2 (図 15・17・18 図版 3)

調査地 中津町858番56

調査面積 5㎡

調査期間 令和2年10月29日

調査担当 木村健明

はじめに 中津町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×2.5mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

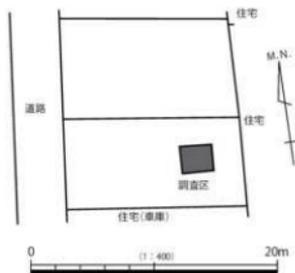


図 17 調査区配置図 (牟礼遺跡 2020-2)

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a層)、1層：現代耕作土層及びその母材である水成層 (1-1a・1-2b層)、2層：粗粒の堆積物を主体とする水成堆積物 (2-1b～2-3b層)、3層：上位層とは層相の異なる細粒の水成堆積物 (3-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 調査では2層中からの湧水が著しく地層断面の確認が主となったが、今回の調査地の北東隣接地では、平成25年に個人住宅の建築に伴って確認調査が行われ、現況地盤から1.65mの深度において遺構が確認されている。しかしながら、今回は遺構・遺物が検出できず、2層とした粗粒の堆積物が厚く堆積する様子を確認したに留まった。遺物が認められなかったため、その堆積時期は定かではないが、当該層準そのものが流路充填堆積物を構成する可能性が高い。

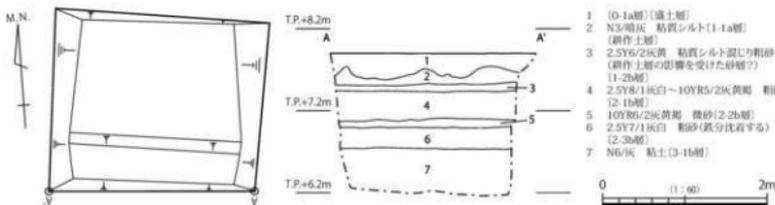


図 18 平・断面図 (牟礼遺跡 2020-2)

第4節 玉櫛遺跡

1. 玉櫛遺跡 2019-1 (図19～21)

調査地 真砂一丁目310番16

調査期間 令和2年2月13日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明

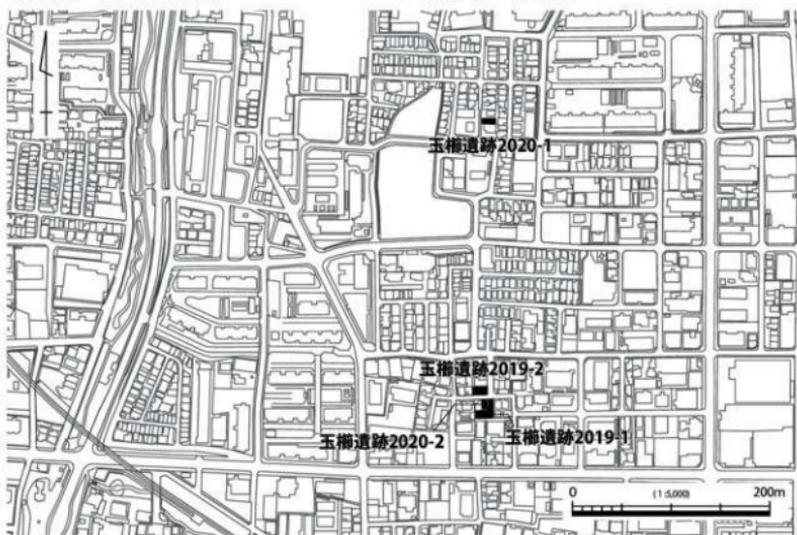


図19 玉櫛遺跡調査地位置図

はじめに 真砂一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別5層に区分でき、上層から0層:現代盛土層(0-1a層)、1層:現代耕作土層(1-1a層)、2層:中世以降に形成されたと目される耕作土層(2-1a層)、3層:水成層(3-1b・3-2b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 いずれの層序からも遺構は検出できなかった。遺物は2層中から土師器・瓦器・陶器片が出土した。いずれも細片のため図示し得なかったが、概ね14世紀前半に帰属するものとみられる。

まとめ 遺構は検出できなかったが、2-1a層中において少量の中世土器を確認することができた。当該層序は、灰白色と暗灰色の粘質シルト層が攪拌される層相を示すことから、中世以降の耕作土層と判断できる。後述する同一敷地内における調査(玉櫛



図20 調査区配置図(玉櫛遺跡)

遺跡 2019-2・玉櫛遺跡 2020-2) では、2-1a 層の下位に位置する層準において著しい相違が認められるため、本調査区における 3 層は流路充填堆積物と把握できる可能性がある。

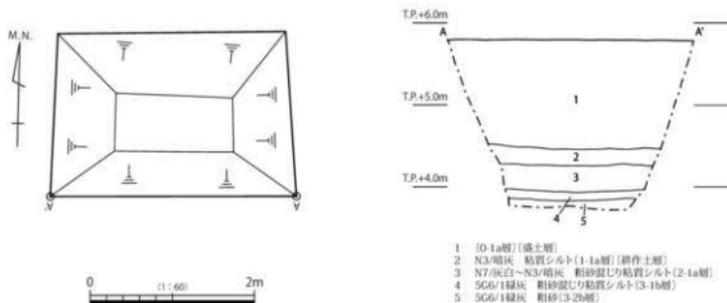


図 21 平・断面図 (玉櫛遺跡 2019-1)

2. 玉櫛遺跡 2019-2 (図 19・20・22 図版 3)

調査地 真砂一丁目310番11

調査面積 6㎡

調査期間 令和2年2月14日

調査担当 木村健明

はじめに 真砂一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南・東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は 7 層に区分でき、上層から 0 層：現代盛土層 (0-1a 層)、1 層：現代耕作土層 (1-1a 層)、2 層：中世耕作土層 (2-1a 層)、3 層：粗砂混じり粘質シルト層 (3-1a 層)、4 層：遺物を含む粗砂混じり粘質シルト層 (4-1a 層)、5 層：やや淘汰の悪い水成層 (5-1b 層)、6 層：粘性

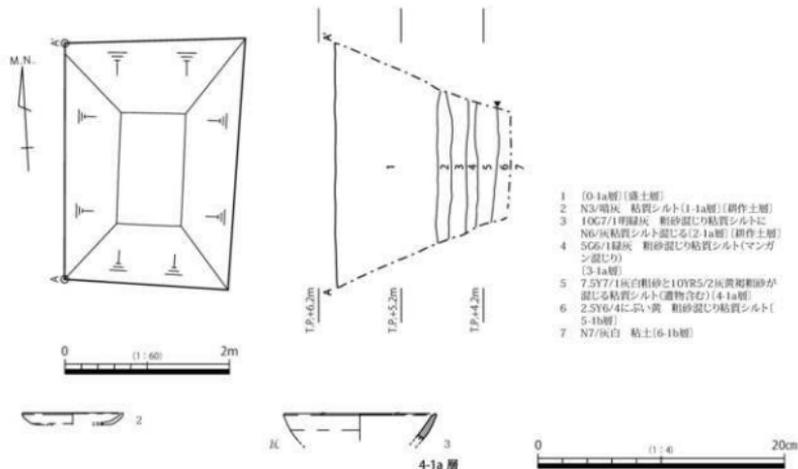


図 22 平・断面図・出土遺物 (玉櫛遺跡 2019-2)

の強い水成層（6-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構は検出できなかったが、4層中から土師器・瓦器が出した。いずれも細片であるが、図化可能なものを図22に掲げている。2は土師器皿である。口径は8.1cm、口縁部は横ナデを施し短く立ち上がる。3は瓦器碗である。細片のため、口径の復元にはやや不安を覚える。器表面の磨滅が著しく詳細は不明とせざるを得ないが、やや厚手の器壁を有しているほか、口縁端部内面に沈線を施す等の諸点から、桶葉型瓦器碗のⅠ～Ⅱ期に帰属するものと考えられようか。

まとめ 今回の調査で確認できた地層断面は、前項で述べた玉櫛遺跡2019-1と比較して2-1a層より下位の地層の層相が大きく異なる。詳細は周辺の調査成果を総合して遺構の分布状況を検討する必要があるが、後述するように今次調査で確認された4-1a層下面を中世の遺構面として把握できる可能性がある。

3. 玉櫛遺跡2020-2 (図19・20・23 図版4)

調査地 真砂一丁目310番15

調査面積 6㎡

調査期間 令和2年6月10日

調査担当 木村健明

はじめに 真砂一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別7層に区分することができ、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：現代耕作土層（1-1a層）、2層：中世耕作土（2-1a・2-2a層）、3層：遺物を含む粗砂混じり粘質シルト層（3-1a層）、4層：淘汰が良く粘性の強い水成層（4-1b・4-2b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構は検出できなかったが、3層中から土師器・瓦器が出土した。いずれも細片が中心であるが、図示可能なものを図23に掲げている（4～7）。

4～6は土師器皿である。いずれも口径8.8～8.9cmの小型のものであり、4・5は口縁部に一段ナ

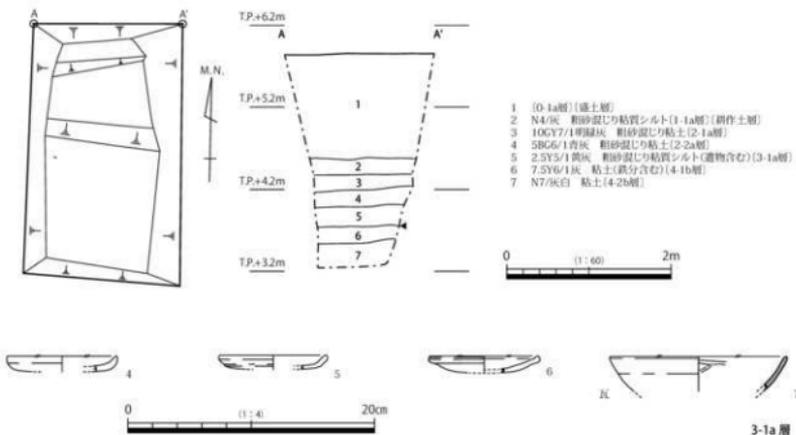


図23 平・断面図・出土遺物（玉櫛遺跡2020-2）

第5節 東京良遺跡

1. 東京良遺跡 2020-1 (図 26～29 図版 5)

調査地 東京良二丁目750番29

調査面積 4㎡

調査期間 令和2年4月6日

調査担当 正岡大実

はじめに 東京良二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面より約0.1 m高い。なお、今次調査区の位置する敷地内では、平成30年度に宅地造成地の新設道路敷設に伴って実施した東京良遺跡 2018-5 調査を皮切りに、個人住宅建築に伴う発掘調査を令和元年度に4件、今年度に3件の合計8件の発掘調査を実施した。それぞれの位置関係については、一括して図27に示している。

基本層序 調査地の基本層序は大別7層、細別12層に区分でき、上層から0層：盛土・現代耕作土層(0-1a・0-2a層)、1層：中～近世に形成されたと目される耕作土層(1-1a～1-3a層)、2層：中世に堆積した可能性のある水成層及びこれを母材とする耕作土層(2-1a・2-2b層)、3層：中世以前に堆積したとみられる水成層(3-1b層)、4層：中世以前に形成された可能性のある耕作土層(4-1ab・4-2ab層)、5層：弥生時代中～後期に形成された土壌層(5-1a層)、6層：弥生時代以前に形成された水成層(6-1b層)の順に堆積が認められた。このうち、3-1b層の下面から5-1a層の上面にかけては、

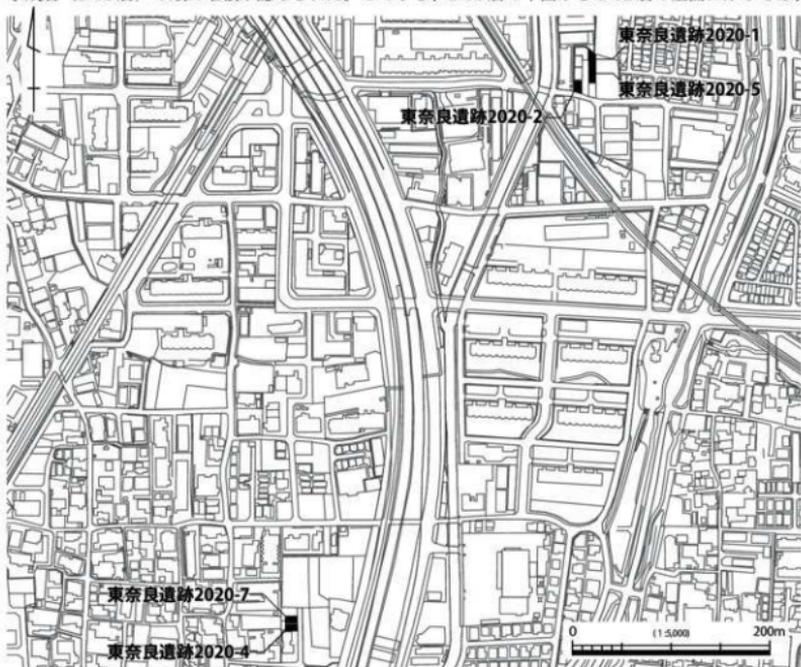


図 26 東京良遺跡調査地位置図 (1)

各層の層界が調和的に乱れる様子が顕著に認められた。3-1b層堆積以後に地震動等による荷重を受けたものと考えられる。なお、いずれの層準についても、先に述べた本宅地造成地内の調査内容に準ずることを確認している。

遺構・遺物 既往の調査成果を鑑み、5層の下面で平面的な調査を実施し、結果として溝2条、土坑1基、小穴2基を確認した。1溝は、南西-北東方向に軸をもつ直線的な溝であり、規模は幅0.3m、検出面からの深さ0.12mを測る。調査区の西端ではほぼ同規模と推測される2溝と直交するが、接続部が調査区外に位置するため重複関係の有無については明らかにできなかった。埋土はともに5-1a層に近似するもので、土坑及び小穴の埋土も概ね同様の埋土で充填されている。

遺物は、5-1a層、1溝、5土坑、4小穴から弥生土器が出土した。細片が中心であるが、図示可能なものを図29に示した(8~11)。8は甕である。体部外面にはハケが施され、「く」字状に外反する口縁部へといたる。摂津IV-1~3様式に属するとみられる。9は大口壺である。磨滅が著しく詳細は不明だが、口縁端部に刻目を施す。



図27 調査区配置図
(東京良遺跡)

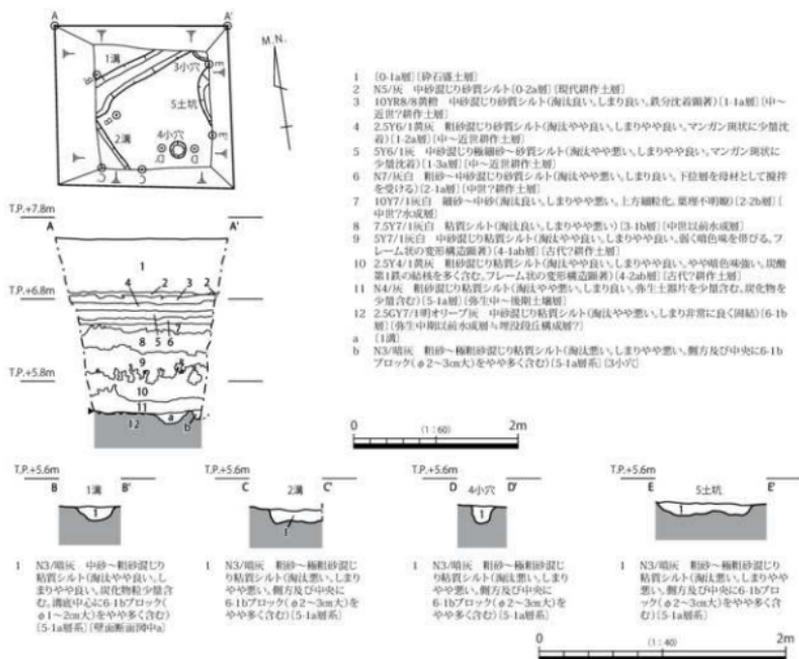


図28 平・断面図(東京良遺跡 2020-1)



図29 出土遺物(東奈良遺跡 2020-1)

10は1溝から出土した広口壺の肩部片である。櫛描直線文と波状文を施す。摂津IV-1～3様式に帰属すると考えられる。11は4小穴から出土した高杯の脚部片である。外面にヘラミガキを施す。

まとめ 今次調査では、限られた面積ながら複数の遺構と弥生土器片を確認することができた。西側の隣接既往調査地点では、弥生時代後期の遺構・遺物が卓越する傾向が認められたが、遺構内出土遺物等から今次調査で検出した遺構の多くは、弥生時代中期後葉に帰属するものと考えられる。

2. 東奈良遺跡 2020-2 (図26・27・30～35 図版6～9)

調査地 東奈良二丁目750番25

調査面積 6.4㎡

調査期間 令和2年4月22日～4月25日

調査担当 正岡大実

はじめに 東奈良二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、まず2×2mを基本とする調査区を設定して調査を行った。なお、後述する拡張区を合計すると調査総面積は、6.4㎡となる。調査地

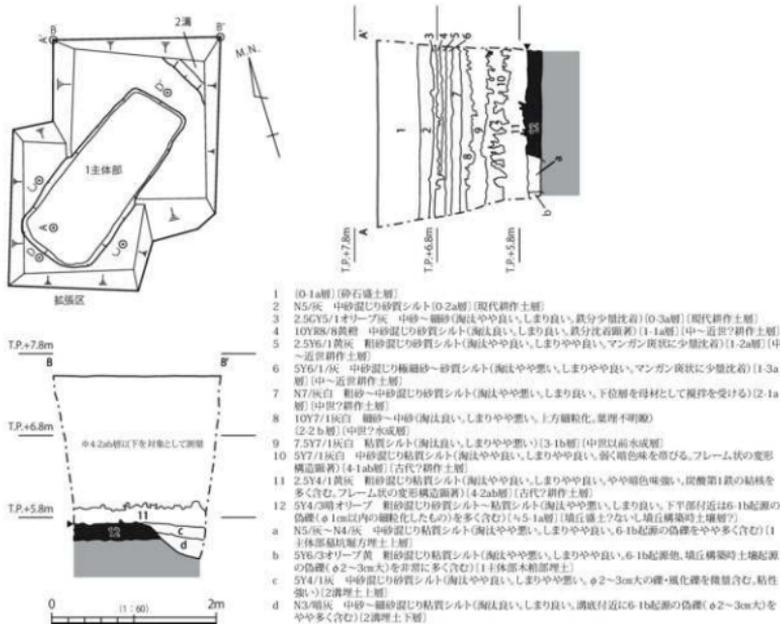


図30 平・断面図(東奈良遺跡 2020-2)

- 1 10-1a層 [礫石遺土層]
- 2 N5/灰 中砂混じり砂質シルト(0-2a層) [現代耕作土層]
- 3 2.5C/V5/1オリープ灰 中砂～細砂(海法やや良い、しまり良い、鉄分少量沈着) (0-3a層) [現代耕作土層]
- 4 10YR/8黄緑 中砂混じり砂質シルト(海法良い、しまり良い、鉄分沈着顕著) (1-1a層) [中～近世?耕作土層]
- 5 2.5Y6/1黄灰 粗砂混じり砂質シルト(海法やや良い、しまりやや良い、マンガン痕状に少量沈着) (1-2a層) [中～近世耕作土層]
- 6 5Y6/1灰 中砂混じり極細砂～砂質シルト(海法やや悪い、しまりやや良い、マンガン痕状に少量沈着) (1-3a層) [中～近世耕作土層]
- 7 N7/灰白 粗砂～中砂混じり砂質シルト(海法やや悪い、しまり良い、下部層を母材として履層を受ける) (2-1a層) [中世?耕作土層]
- 8 10Y7/1灰白 細砂～中砂(海法良い、しまりやや悪い、上方細粒化、薬理不明瞭) (2-2b層) [中世?水成層]
- 9 7.5Y7/1灰白 粘質シルト(海法良い、しまりやや悪い) (3-1b層) [中世以前水成層]
- 10 5Y7/1灰白 中砂混じり粘質シルト(海法やや良い、しまりやや良い、弱く褐色味を帯び、フレーム状の変形構造顕著) (4-1a層) [古代?耕作土層]
- 11 2.5Y4/1黄灰 粗砂混じり粘質シルト(海法やや良い、しまりやや良い、やや褐色味強い、炭黒第1期の結核を多く含む、フレーム状の変形構造顕著) (4-2a層) [古代?耕作土層]
- 12 5Y4/3暗オリープ 粗砂混じり砂質シルト～粘質シルト(海法やや悪い、しまりやや良い、下部平坦付近は6-1b層の偽層(φ10cm以内の細粒化したもの)を多く含む) (4-5-1a層) [墳丘盛土?ない墳丘構築時土壌腐層?]
- a N5/灰～N4/灰 中砂混じり粘質シルト(海法やや悪い、しまりやや良い、6-1b層の偽層をやや多く含む) (1-1主体部基礎層?埋土土層)
- b 5Y6/3オリープ黄 粗砂混じり粘質シルト(海法やや悪い、しまりやや良い、6-1b層の偽層、墳丘構築時土壌腐層の偽層(φ2～3cm大)を非常に多く含む) (1-1主体部基壇部土層)
- c 5Y4/1灰 中砂混じり砂質シルト(海法やや良い、しまりやや悪い、φ2～3cm大の礫・風化礫を微量含む、粘性強い) (2溝埋土層)
- d N3/黒灰 中砂～細砂混じり粘質シルト(海法良い、しまり良い、溝底付近に6-1b層の偽層(φ2～3cm大)をやや多く含む) (2溝埋土下層)

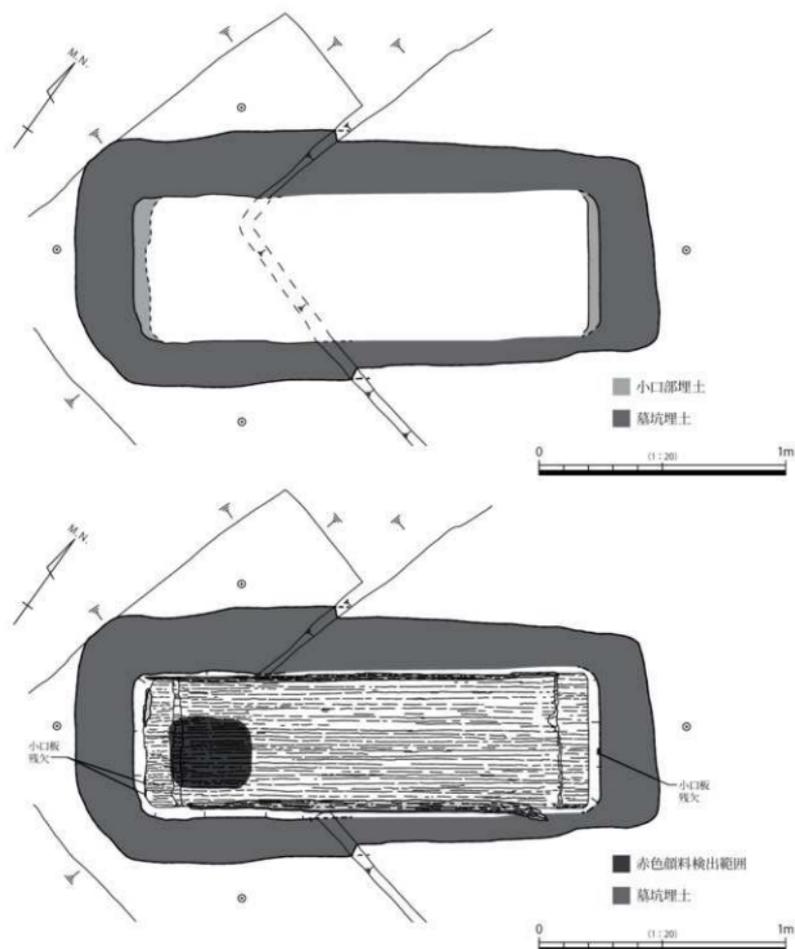


図31 1主体部 検出状況平面図

の現況地盤は東面する道路面より約0.1 m高い。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は先に述べた東奈良遺跡 2020-1 同様、大別7層、細別12層に区分できる。基本的にはいずれの層序も既往の調査内容に準ずるが、今次調査で確認した5-1a層は後述するように方形周溝墓構築時の土壌ないしは填丘盛土として捉えられることが新たに判明した。

遺構・遺物 調査では既往の調査成果を鑑み、5-1a層の下面を1面として平面的な調査を実施した。結果として、4-2ab層下面に墓坑の構築面を持つ木棺墓1基と、周溝の可能性のある溝の一部を検出するにいたったため、埋葬施設の全容を把握するべく調査区を拡張し、周囲の安全と土壌の崩壊を防止す

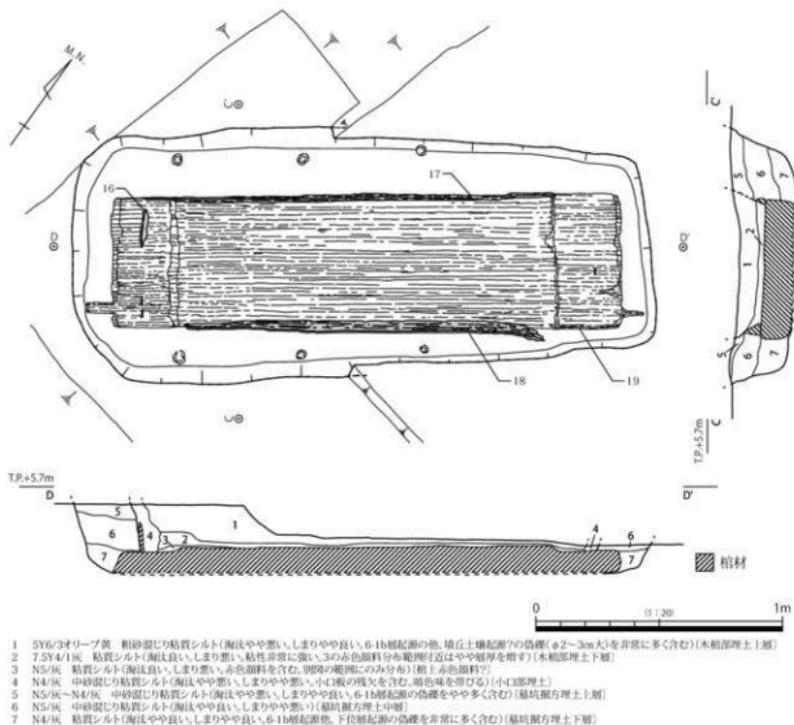


図 32 1主体部 平・断面図

るため埋戻しと掘削を繰り返しながら、3日間にわたって調査を実施した。なお、拡張部においては、墓坑本来の掘込み面である 4-2ab 層下面からの調査を実施した。以下、検出遺構ごとに記述を進める。

1主体部 1主体部は南西-北東方向に軸を持つ、やや不整な隅丸長方形の墓坑に木棺をおさめた木棺墓である。墓坑の規模は全長 2.34 m、幅 1.04 ~ 0.78 m、検出面からの深さ 0.28 m を測り、掘方の断面形状は緩やかな逆台形を示す。南西側の底面は北東部と比較してやや幅が広い。

墓坑内には棺材として底板・側板・小口板が遺存しており、その検出状況から当該木棺墓は一段低く削り出した平端面上に小口板をのせ、側板で小口板を挟み込む構造の組合式箱形木棺墓であることが明らかとなった。木棺底板には針葉樹の板目材を用いた軸部を残したままの厚材とみられる板材が転用されており、側板はミカン割状の棒材によって構成されている。なお、底板より上部の遺存状況は全体的に不良であり、蓋板は認められなかったほか、側板の上半部及び小口板の大部分は腐食によって消失していた。特に北東部を閉塞する小口板は、ほぼ大部分が消失しており、埋土の微妙な差異による痕跡と残欠からその存在を推定するに留まっている。

墓坑内の埋土は、やや淘汰の悪い灰色粘質シルトにベース層である 6-1b 層起源の偽礫を多く含むものを基調とする。一方、木棺内の埋土は偽礫を多数含み、淘汰の悪いオリーブ灰色粘質シルトを基調と

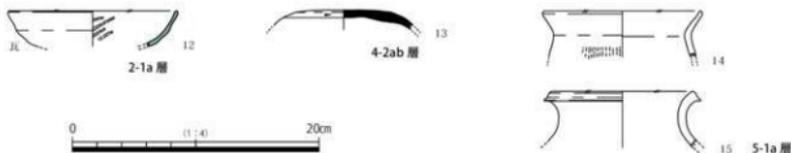


図33 出土遺物(1)(東奈良遺跡 2020-2)

する上層と、淘汰が良く極めて粘性の強い灰色粘質シルトの下層から構成される。このうち、下層については棺内の内容を示す可能性があると慎重に掘削を進めたが、人骨や副葬品等は認められなかった。とはいえ、木棺南西部の底板直上には部分的ながら赤色顔料を含む薄層が分布する地点があり(図31 下段・図版8-5)、埋葬頭位の推定に際し重要な知見を得ることができた。

このほか、注意すべきこととして墓坑内南西半で検出した杭痕跡について述べておく(図32・図版8-6~8)。これらの杭痕跡は墓坑底面まで掘削を進めてはじめて検出できたものであり、規模は直径2~5cm前後を測る。墓坑底面からの深さはほとんどなく、検証のために掘削を試みたところすぐに消失してしまった。杭痕跡は合計で6箇所に確認でき、いずれも木質の残欠を含む墓坑埋土とほぼ同質の土を埋土とする。これらの杭痕跡については、検出当初は上位の地層からの貫入の可能性を考慮していたが、平面的に概ね対応する位置関係で3対6基が認められたため、木棺墓を構成する要素として認識するにいたった。先に述べたように、これらの杭痕跡は墓坑の検出時には認められなかったものと考えているが、限られた条件下で行った調査であるため確信はない。これら杭痕跡が墓坑掘方の加工時に形成されたものか、もしくは埋葬時に形成されたものかは、その性格を明らかにするうえで極めて重要な違いだが、こうした事情も手伝ってその性格については今のところ明らかにし難いと言わざるを得ない。類例の追加を俟って検討を進めたいと考える。

遺構内からは弥生土器片が2片出土したが、いずれも細片のため、出土土器から遺構の帰属時期を特定することは困難である。このため、当該埋葬施設の時期比定には困難を伴うが、既往の調査成果等を勘案して、弥生時代中期後葉~後期の周溝墓に伴うものと考えておきたい。

2溝 調査区の北東隅で検出した溝状遺構である。拡張前の調査区内に位置するため、実際の検出は5-1a層下面で行ったが調査区壁面断面の検証から1主体部同様、4-1ab層下面において検出できる遺構であることが明らかとなった。大半が調査区外に位

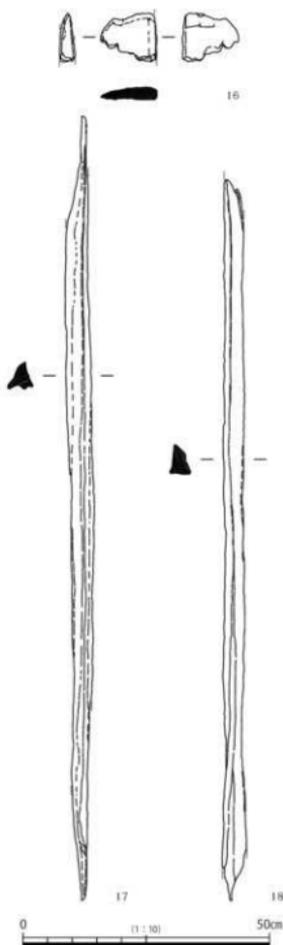


図34 出土遺物(2)
(東奈良遺跡 2020-2)

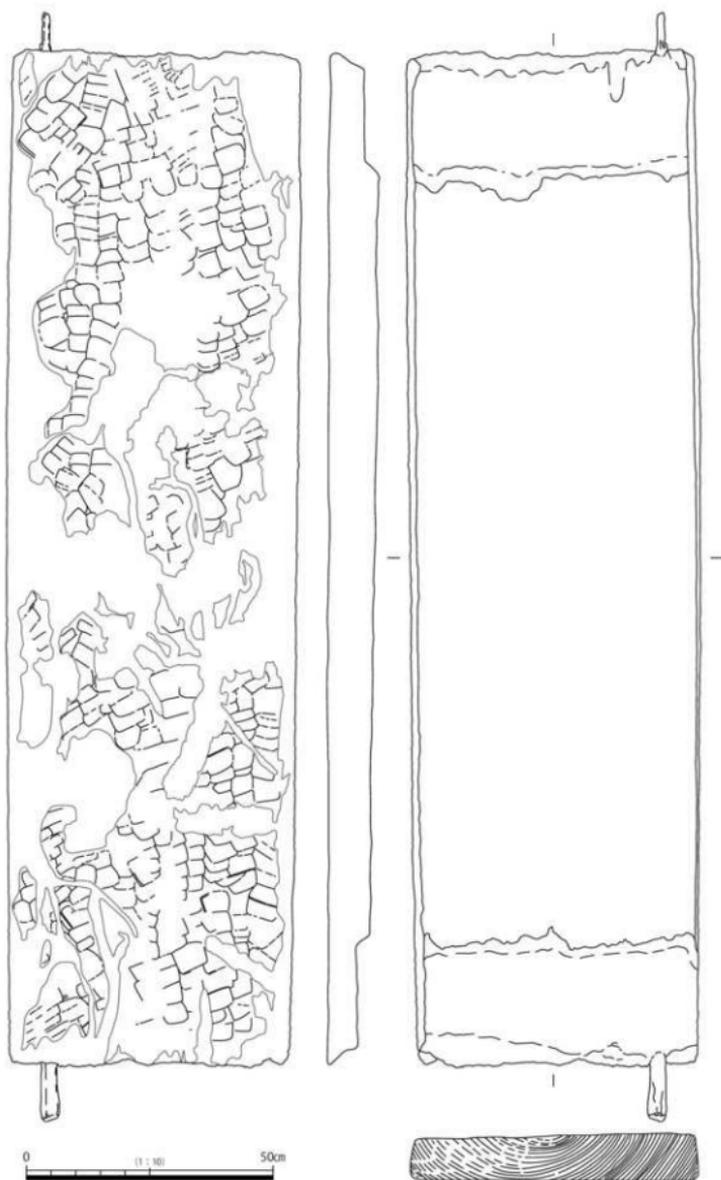


图 35 出土遺物 (3) (東奈良遺跡 2020-2)

置するため遺構の正確な規模は不明だが、既往の調査で検出した溝との位置関係や平面形状から南東—北西方向に軸を持つ溝とみて良いと考えられる。この想定が正しければ、2溝は1主体部を埋葬施設とする方形周溝墓の周溝と考えると大過ないであろう。溝の埋土は色調の上では5-1a層とした墳丘土壌ないし墳丘盛土層として捉えられる地層と近似しているものの、今次調査の5-1a層は淘汰の悪いしまりの良い土壌であるが、2溝の埋土は淘汰の良いしまりの悪い層準であることから明瞭に弁別が可能である。遺物は出土しておらず、遺構の詳細な時期は判断しがたい。

出土遺物 出土遺物は全体的に少なく、2-1a～5-1a層に含まれていた遺物のほか、先に述べた木棺内埋土から出土した弥生土器の細片のみである。このうち図示可能なものを図33に掲げた。12は和泉型瓦器椀である。13世紀後半の所産か。13は須恵器杯蓋。6世紀前半の所産か。14・15は弥生土器である。14は壺の口縁部片とみられる。細片のため、図上復元のフォルムにやや違和感を覚えるが、他の土器と比較してやや帰属時期が下る可能性がある。15は広口壺の口縁部片である。全体のプロポーシオンが不明なため詳細は明らかでないが、概ね摂津IV様式の範疇に収まるものと考えられる。

このほか、1主体部で出土した木棺材を図34・35に掲げた。16は小口板、17・18は側板、19は底板である。16～18は遺存状態が悪く、本来の形状からその姿をかなり減じているものと推測される。17は全長159.7cm、幅5.1cm、高さ5.4cmを測り、18は全長146.8cm、幅5.0cm、高さ5.8cmを測る。16・18は板目材に近い木取りの材で、17は柁目材に近い木取りの材を用材として用いている。いずれも加工痕は認められなかった。19はその形状から扉材を転用したものと考えられる。大径木の板目材を用材として用いられており、全長227.0cm、最大幅59.0cm、厚み9.5cmを測る。上下に大きさの異なる幅2～4cmの軸部が残存していることから、16～18とは異なり本来の形状をほぼ留めているものと推察できる。棺の表面として用いられた面は埋没時の腐食の進行により年輪の晩材が露出しており、加工痕はその姿を留めていない。小口板を載せる部分は全体に2～3cm程度削りこまれているが、両端部は部分的に削り残されている。一方、裏面には埋没時の腐朽を免れた部分に加工の区画線縁が極めて明瞭に遺存しており、区画線縁に認められる加工痕の幅は概ね5cmまでである。側面は腐食は進んでいないものの、加工痕は認められなかった。転用前機能時の風化によるものであろうか。

まとめ 今次調査では、扉材を転用したと考えられる木棺材を用いた組合式箱型木棺墓のほか、周溝墓の周溝と推定される溝を確認する等、極めて重要な成果を挙げることができた。これについては、東隣で実施した東京良遺跡2019-1において、調査区の北西隅で北東—南西方向に軸を持つ溝状遺構内から、厚い板材の上に棒材が載っている状況を確認していた(茨木市教育委員会2020)が、今回同じ構造を採用する埋葬施設を確認したことで、当該地域周辺が弥生時代の墓塚を形成していたことが明らかとなった。以上のことから、周辺域で確認している並行する溝群は方形周溝墓の周溝と位置づけることができよう。なお、掘削残土処理の都合上、調査区の拡張は最小限度に留めざるを得ず、今次調査で確認した5-1a層(墳丘盛土ないし墳丘構築時土壌)とその他既往の調査で確認した5-1a層との関係を明らかにするための周溝外の土壌との関係については、検討する材料を欠く結果となった。周辺域での調査の累積によってより詳細に検討を深めていきたいと考える。

また、木棺底板を構成していた19については、扉材であるという想定が正しければ、弥生時代の資料としては希少な扉材類例の追加となる。帰属時期の特定が重要であるが、既に述べたように出土遺物に乏しく決め手を欠く。本市では現在、保存処理及び樹種同定とともに炭素14年代測定法による年代測定の実施を計画中である。その結果については、稿を改めて報告したい。

3. 東奈良遺跡 2020-5 (図 26・27・36 図版 10)

調査地 東奈良二丁目750番30

調査面積 4㎡

調査期間 令和2年7月20日

調査担当 正岡大実

はじめに 東奈良二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路面より 0.1 m程度高い。

基本層序 調査地の基本層序は先に述べた東奈良遺跡 2020-1 同様、大別 7 層、細別 12 層に区分できる。基本的にいずれの層準も既往の調査内容に準ずることを確認した。

遺構・遺物 先述した東奈良遺跡 2020-2 の調査成果を考慮して、まず 4-2ab 層下面において平面的な調査を試みたが遺構は検出できず、結果として 5-1a 層下面において溝状遺構 1 条 (1 溝) を検出した。1 溝は大半が調査区外に位置しているため詳細は不明だが、直線的な平面形を示すことに加え、既往の調査で検出した溝の多くとほぼ同じ軸を示していることから溝として認識した。遺物は 2~4 層から瓦器碗が出土したほか、5-1a 層及び 1 溝から弥生土器が出土した。このうち図示可能なものを図 36 に示した。20 は瓦器皿ないし碗、21・22 は瓦器碗である。いずれも細片のため口径の復元には不安を覚える。内面のヘラミガキは粗い。和泉型Ⅲ-3~Ⅳ-1 期の所産であろうか。出土層準は 2~4 層としたが、概ね 4 層に近い地点から出土した。4 層は地震動等を要因とするフレーム状の変形構造が顕著な層準であるため上位層の混入の可能性を排除しきれず、周辺域でのさらなる調査事例の追加により当該層準の時期比定を慎重に行うべきであるが、遺物の希少な地層の形成時期を検討する上で重要な成果を得ることができた。なお、弥生土器はいずれも細片のため図示し得ず、帰属時期も不明である。

まとめ 面積は狭小ながら、遺構・遺物を確認することができた。確認できた溝は、部分的な検出に留まったため推測の域を出ないが、平面的な位置関係から方形溝溝葬の溝を構成する可能性がある。

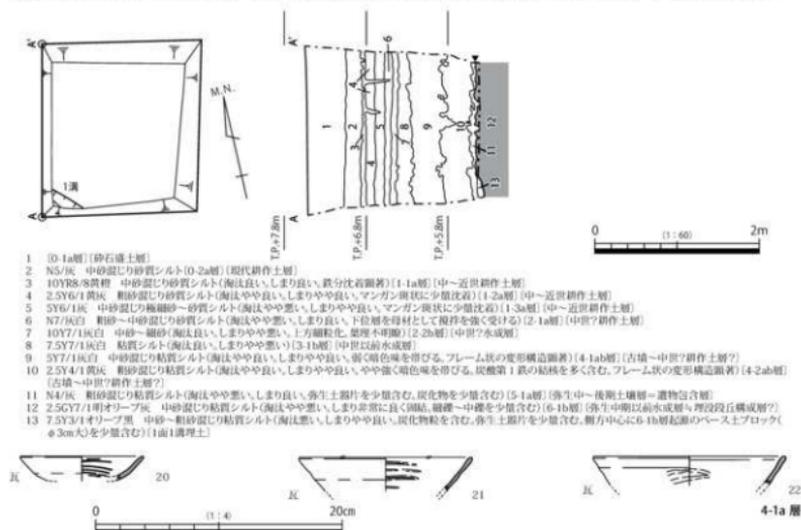


図 36 平・断面図・出土遺物 (東奈良遺跡 2020-5)

4. 東奈良遺跡 2020-4 (図 26・37・38 図版 10)

調査地 沢良宜西二丁目126番7

調査期間 令和2年6月8日

調査面積 6.25㎡

調査担当 富田卓見

はじめに 沢良宜西二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2.5 × 2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別5層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・攪乱土層(0-1a層)、1層：耕作土層(1-1a・1-2a層)、2層：土壌化層(遺物包含層)(2-1a層)、3層：ベース土層(3-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構の検出を期して、2層下面において平面的な調査を行ったが、遺構を確認することはできなかった。遺物は、2-1a層より土師器・瓦器碗が認められた。いずれも細片で磨滅も著しいため、かろうじて図示し得たのは図38に掲げた土師器皿(23)のみである。23は細片のため復元径に不安を覚えるものの径7.7cmを測り、口縁部に一段ナデを施すことから、概ね13世紀後半～14世紀前半にかけての所産とみられる。図示し得なかったが、出土した瓦器碗は焼成が不良で低平な高台が認められることから、概ね近似した帰属時期を考慮してもよいと考える。

まとめ 今次調査区の周辺では、北側(HN15-13)及び東側(HN13-1)に隣接する土地において宅地造成に伴う発掘調査を実施している。これら既往の調査では、中世の居住域を主とする弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を多数確認しているが、今回の調査では遺構は認められず、遺物も稀薄であった。しかしながら、層相や遺構面の深度等はいずれも極めて近似していることから、今次調査で遺構検出を実施した2層下面は、概ねHN15-13の第2遺構面やHN13-1の遺構面に比定することが可能と考えられる。

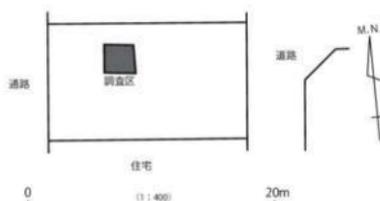


図 37 調査区配置図(東奈良遺跡 2020-4)

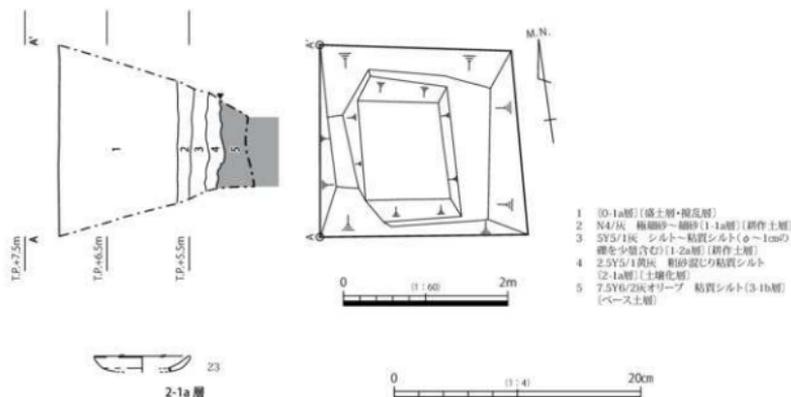


図 38 平・断面図・出土遺物(東奈良遺跡 2020-4)

5. 東奈良遺跡 2020-7 (図 26・39・40 図版 10)

調査地 沢良宜西二丁目126番8

調査面積 6㎡

調査期間 令和2年11月26日

調査担当 木村健明

はじめに 沢良宜西二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は5層に区分でき、上層から0層:現代盛土層(0-1a層)、1層:耕作土層(1-1a層)、2層:中～近世耕作土層とみられる層準(2-1a層)、3層:粗砂混じり粘土を主体とする水成層(3-1b層)、4層:淘汰の良い水成層から形成されるベース土層(4-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 既往の調査成果を考慮して2層下面及び3層下面で遺構検出を行ったが、遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することはできなかった。

まとめ 周辺では、既往の調査として先に述べたように東側でHN13-1、北側でHN15-13、南側で前項に述べた東奈良遺跡 2020-4とした調査が行われている。このうち、HN13-1、HN15-13調査では、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物を確認しており、主に中世の居住域と考えられる諸遺構を多数検出している。しかし、東奈良遺跡 2020-4及び今回の調査では一転して希薄となっており、今回の調査地東側の南北道路が中世の居住域の境界付近にあたる可能性が考えられる。周辺での調査事例の追加によってさらに検証を深める必要があるが、遺構分布の把握にあたり重要な知見を加えることができた。

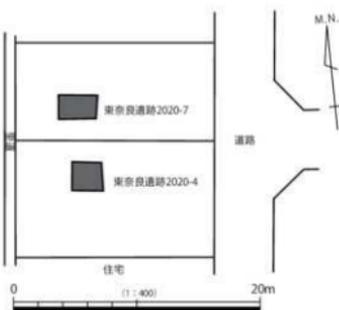


図 39 調査区配置図

(東奈良遺跡 2020-7)

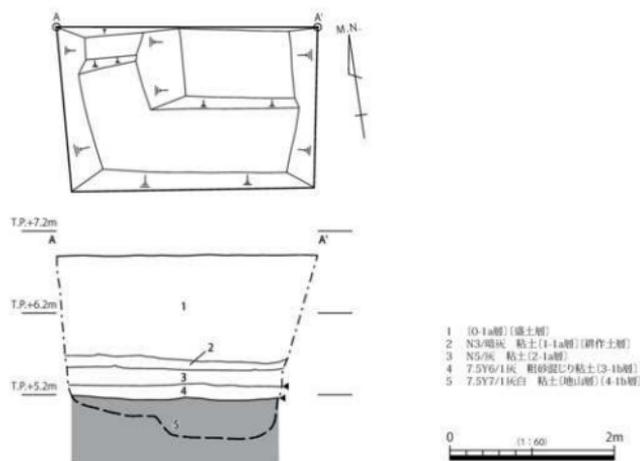


図 40 平・断面図(東奈良遺跡 2020-7)

6. 東奈良遺跡 2020-8 (図 41 ~ 43 図版 11)

調査地 奈良町525番

調査期間 令和2年12月7日

調査面積 3.9㎡

調査担当 富田卓見

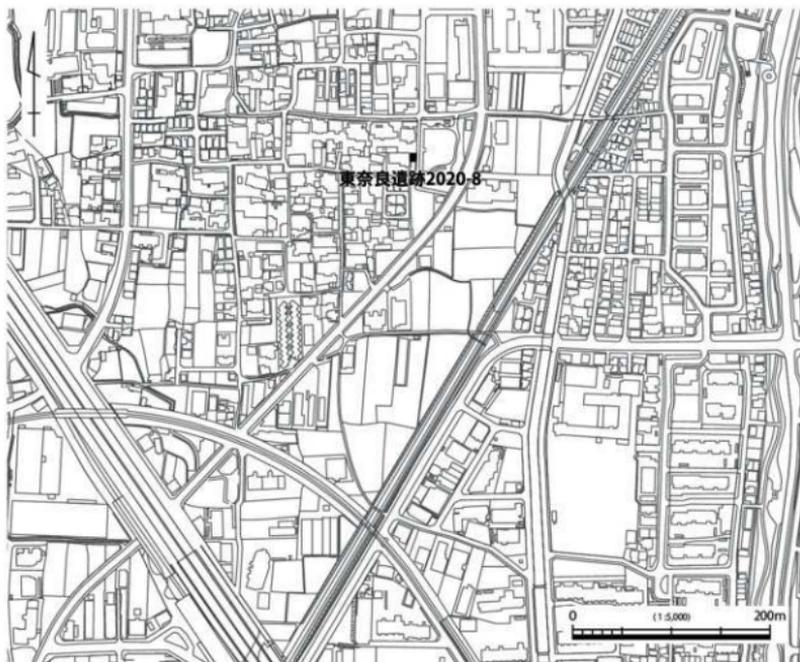


図 41 東奈良遺跡調査地位置図 (2)

はじめに 奈良町において計画された個人住宅の建築に伴い、 1.5×2.6 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別9層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・攪乱土層 (0-1a・0-2a層)、1層：近世～現代に形成されたと目される耕作土層 (1-1a～1-4a層)、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層 (2-1a層)、3層：遺物を含む土壌層 (3-1a層)、4層：ベース土層となる層序 (4-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では3層下面において遺構検出を行い、結果として溝1条、ピット4基を検出した。5溝は、調査区の中央付近に位置する東西方向の溝である。幅0.15 m、検出面からの深さ0.06 mを測る。ピットの埋土は概ね二者に弁別が可能であり、色調のやや淡い黄灰色を基調とするもの (2・3ピット) と黒褐色の埋土を基調とするもの (1・4ピット) がある。検出



図 42 調査区配置図
(東奈良遺跡 2020-8)

面からの深さは1～3ピットは0.15～0.2mを測り、4ピットが0.3mともっとも深い。遺物は3-1a層から土師器、4ピットから土師器・黒色土器、5溝から土師器がそれぞれ出土した。いずれも細片が中心であり、かろうじて図示し得たものを図43に掲げた(24～27)。24・25は3-1a層から出土した土師器皿ないし杯である。25は指オサエの残る体部から緩く内湾して立ち上がり、つまみ出して強く外反する口縁部へといたる。復元口径14.4cm、残存高2.8cmを測り、器壁は全体的に薄い。10～11世紀の所産か。26・27は4ピットから出土した。26はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。27は黒色土器B類椀である。口縁端部内面に沈線が一条施される。いずれも細片のため口径の復元にはいたらなかった。24・25同様、10世紀後半～11世紀前半代の所産と考えられる。

まとめ 今次調査では、限られた面積ながら遺構・遺物を確認することができた。本調査区周辺での調査事例は僅少であり、重要な知見を加えることができた。

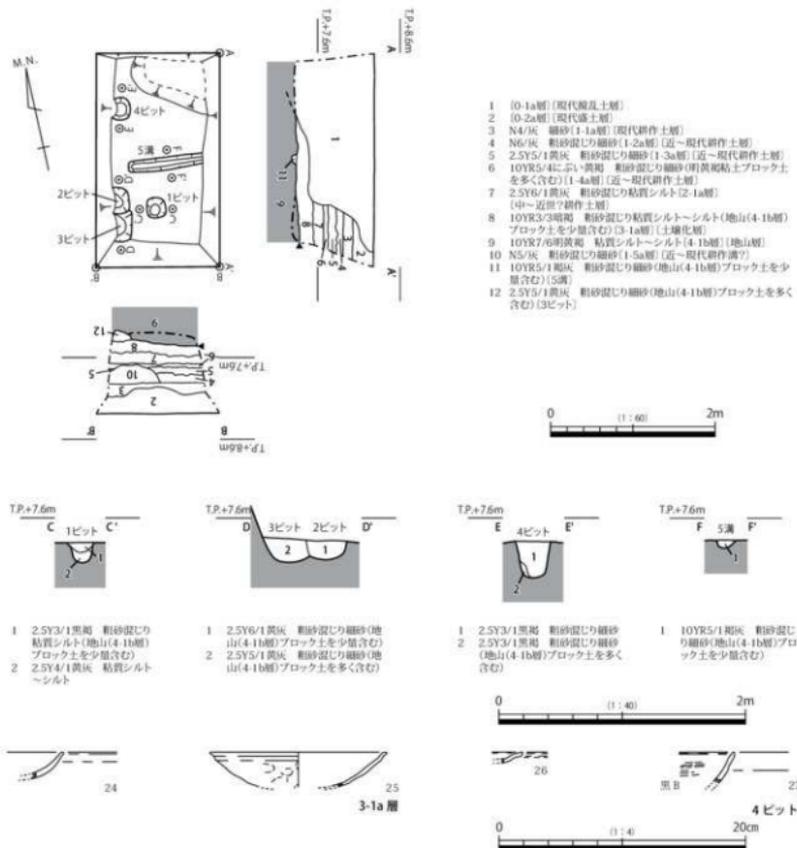


図43 平・断面図・出土遺物(東奈良遺跡 2020-8)

第6節 鮎川遺跡

1. 鮎川遺跡 2020-1 (図 44 ~ 47 図版 12)

調査地 鮎川二丁目68番26

調査面積 5㎡

調査期間 令和2年4月10日

調査担当 富田卓見

はじめに 鮎川二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南面する道路面より約0.45 m高く、敷地内はほぼ平坦である。



図 44 鮎川遺跡調査地位置図

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・攪乱土層（0-1a層）、1層：近世～現代耕作土層（1-1a・1-2a層）、2層：古代～中世の遺物を包含する土壌層（2-1a層）、3層：水成層（3-1b・3-2b層）、4層：水成層（4-1b・4-2b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 2-1a層下面において遺構検出を行ったところ、結果としてピットを3基を検出した。ピットは直径0.3～0.35 mの平面不整形円形のものであり、検出面からの深さは1ピットが0.15 m、2・3ピットが0.05 mと全体的に浅い。埋土はいずれも2-1a層よりも淡い色調を呈する細粒の堆積物で充填されている。遺物は2-1a層及び1・3ピットから出土した。いずれも細片が主体であり、図示可能なものは少ないが、2-1a層出土遺物を図47に掲げた（28～37）。28は土師器皿である。平底から緩く外反する体部を経て上半から口縁部にかけても外反し、丸く収める口縁端部へといたる。細片のため口径の復元には不安を残すが10.2cmを測る。京区期前後に帰属するものとみられ、14世紀の所産と考えられる。29は土師器碗

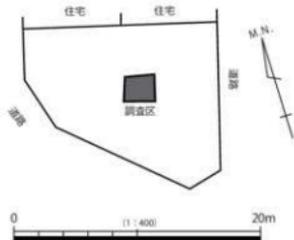
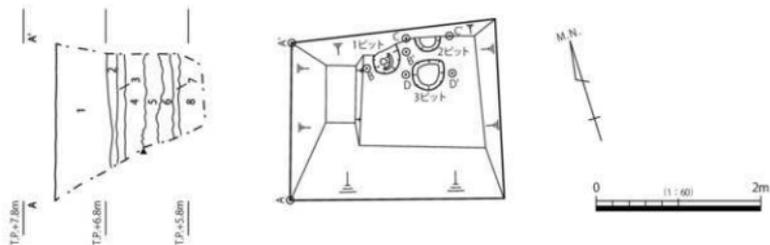


図 45 調査区配置図 (鮎川遺跡 2020-1)



- 1 0-1a層 (現代遺土・埋立土層)
- 2 10YR4/2灰黄緑 細砂(1-1a層) (近現代耕作土層)
- 3 10YR5/4にぶい黄緑 細砂(マンガン粒を少量含む) (1-2a層) (近世?耕作土層)
- 4 2.5Y6/1黄灰 粗砂混じり細砂(φ~3cmの礫を少量、土器片を少量含む) (2-1a層) (古代~中世包含層)
- 5 2.5Y6/3にぶい黄 輪軸砂~シルト(灰シルトがロックを多く含む) (3-1b層) (水成層)
- 6 10YR5/4にぶい黄緑 粗砂混じり細砂~極細砂(3-2a層) (水成層)
- 7 2.5Y6/4にぶい黄 シルト~粘質シルト(4-1b層) (水成層)
- 8 5BG6/1青灰 シルト(4-2b層) (水成層)

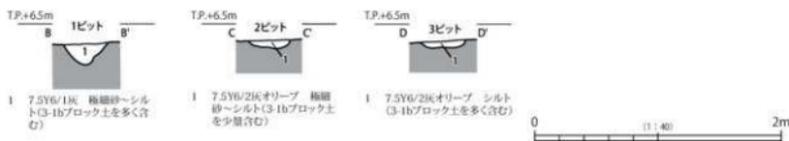


図46 平・断面図(鮎川遺跡2020-1)

である。京Ⅲ~Ⅳ期頃(10世紀代)の所産であろうか。微細な破片のため、器形及び口径の復元にについては推測の域を出ない。30は黒色土器A類碗である。細片のため詳細は不明である。31・32は土師器羽釜である。32は幅の狭い鈿部から短く直立する口縁部へといたる器形からいわゆる摂津C型羽釜とみられる。10~11世紀の所産とみられる。33は緑軸陶器の体部片である。焼成は硬質で灰色を示し、軸調はやや淡い。10世紀代の所産か。34は土師器杯ないし皿である。器形の全容は窺えないが、緩やかに内湾して立ち上がる体部から弱くつまみ出して外反する口縁部へといたる。磨滅が著しく詳細は不明だが、体部外面はケズリが施されている可能性がある。口径の復元にはいたらないものの径19cm前後の杯状をなす可能性がある。胎土は全体的に赤褐色の色調を呈する。35は土師器高杯杯底部片。36は須恵器杯B蓋である。つまみはやや扁平である。37は須恵器杯Bである。34~37は概ね平城Ⅰ~Ⅱに帰属するものとみられ、8世紀前半の所産と考えられる。なお、1・3ピットの出土遺物は微細な土師器片のみであり、図示することはできず、帰属時期は不明とせざるを得なかった。

まとめ 今回の調査では、限られた面積ながら遺構・遺物を確認することができた。周辺では調査事例が少なく、遺跡の様相が不明瞭であることから重要な知見を加える結果となった。

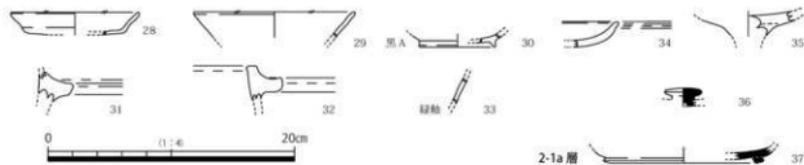


図47 出土遺物(鮎川遺跡2020-1)

第7節 太田茶臼山古墳陪塚群

1. 太田茶臼山古墳陪塚群 2020-1 (図48～50 図版12)

調査地 高田町1番103の一部

調査面積 4㎡

調査期間 令和2年10月30日

調査担当 富田卓見

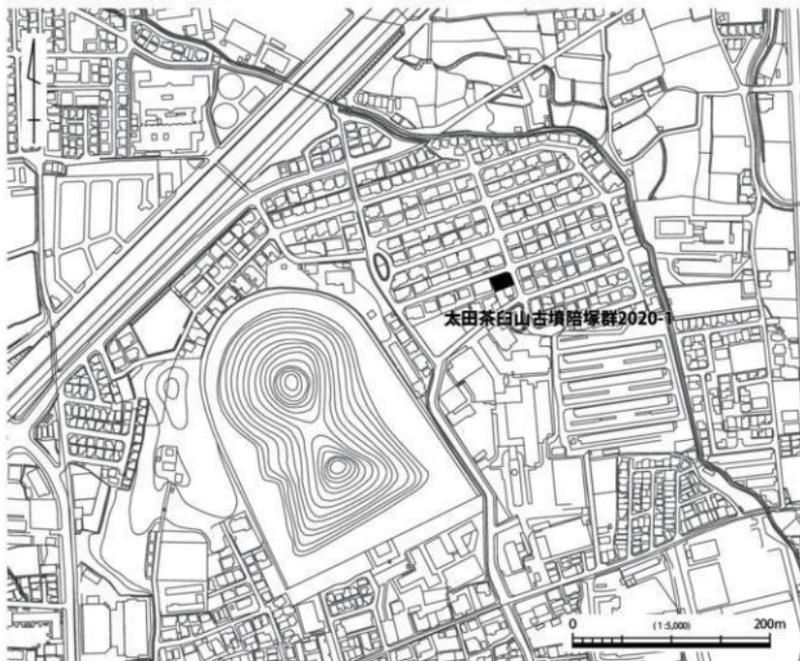


図48 太田茶臼山古墳陪塚群調査地位置図

はじめに 高田町において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北面する道路面より0.3～0.4 m程度高く、敷地内はほぼ平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は0層とした近現代盛土層のみを確認した。

遺構・遺物 計画深度中においては遺構は認められなかった。出土遺物としては、0層中より須恵器片が出土した。細片のため図示することはできず、帰属時期も不明である。

まとめ 今次調査では遺構は確認できなかった。

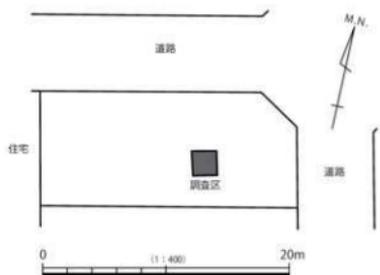


図49 調査区配置図

(太田茶臼山古墳陪塚群 2020-1)

周辺域では、遺構面が遺存している場合には比較的浅い深度で遺構が検出されることから、本調査区においては既に攪乱を受けていたものと考えられる。

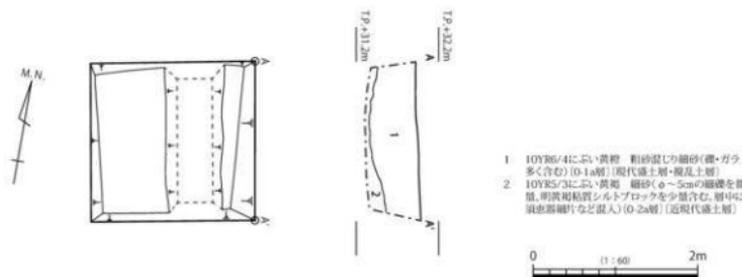


図 50 平・断面図 (太田茶臼山古墳陪塚群 2020-1)

第 8 節 宿久庄遺跡

1. 宿久庄遺跡 2020-2 (図 51 ~ 53 図版 12)

調査地 宿久庄三丁目503番1

調査面積 6㎡

調査期間 令和2年12月21日

調査担当 木村健明

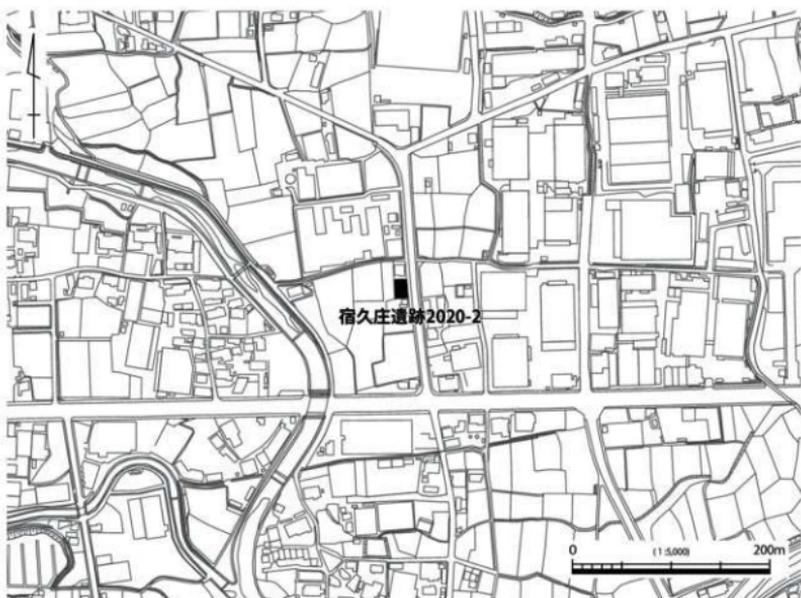


図 51 宿久庄遺跡調査地位置図

はじめに 宿久庄三丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、 2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面より0.4 m程度低く、敷地内はほぼ平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：現代耕作土層とみられる層準（1-1a層）、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層（2-1a層）、3層：遺物を含み礫を含んだ粘質シルトからなる層準（3-1a～3-3a層）、4層：礫混じり粗砂を基調とするベース土（4-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 3層中（3-2a層下面）及び3層下面で遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。遺物は2-1a層から須恵器、3-2a層から土師器がそれぞれ出土した。いずれも細片が中心だが、図示可能なものを図53に掲げた（38・39）。38は須恵器杯である。胎土は粗く焼成も不良である。細片のため復元径に疑問が残る。39は土師器杯である。細片のため口径の復元にはいたらなかった。やや直線的な体部から短くつまみ出して屈曲させる口縁端部へといたる。体部外面にはヘラケズリが施され、胎土は全体的に赤褐色の色調を示す。いずれも小片のため詳細な時期は決め難いが、8世紀代の所産であろうか。

まとめ 今回の調査では遺構は確認できなかった。近隣で行われた既往の調査では、約80 m南東に位置するSHK04-1調査において「褐色土（包含層）」下の「黄濁色土」上で遺構が検出されており、当該遺構面は概ね現況地盤から0.85～1.0 mの深度にあるとされている。今回の調査では、この遺構を検出した層は確認できなかったが、その他の層準は概ね一致していると考えられる。今回確認することができた3層は層厚約0.6 mを測るが、礫を多く含んでおり、二次堆積した包含層である可能性も考えられよう。

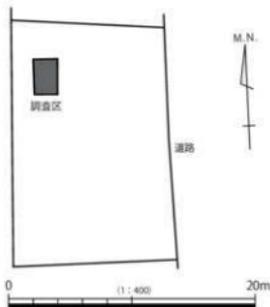


図52 調査区配置図
(宿久庄遺跡 2020-2)

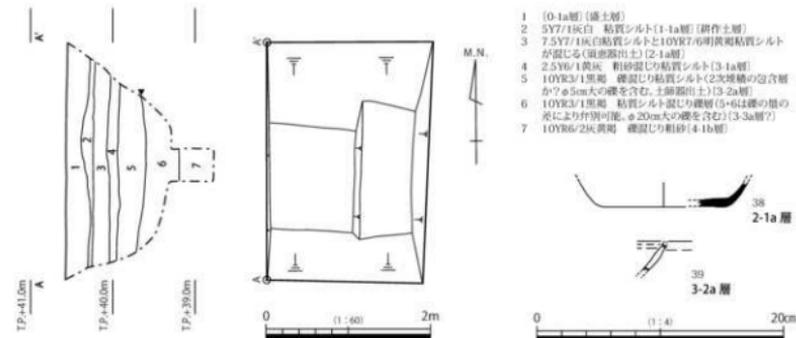


図53 平・断面図・出土遺物 (宿久庄遺跡 2020-2)

〔参考文献〕

茨木市教育委員会 2020 『令和元年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—令和元年度国庫補助事業—』

写 真 图 版

1. 茨木遺跡 2020-2 A区
南壁断面（北から）

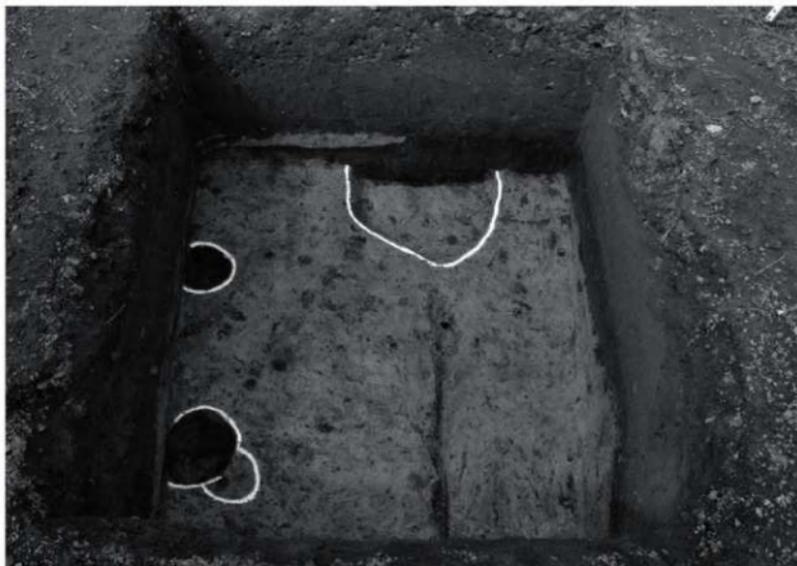


2. 茨木遺跡 2020-4
調査区南壁断面（北から）



3. 上中条遺跡 2019-2
1面完掘状況（北から）





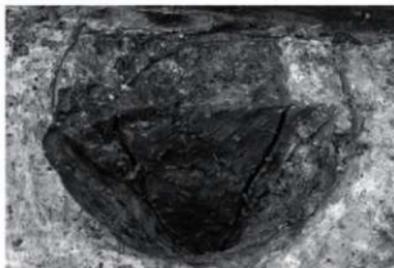
1. 春日遺跡 2020-2 1面完掘状況 (南から)



2. 調査区北壁断面 (南から)



3. 1面1ビット断面 (南から)



4. 1面2ビット断面 (東から)



5. 1面3・4ビット断面 (北東から)

1. 牟礼遺跡 2019-5
調査区東壁断面（西から）



2. 牟礼遺跡 2020-2
調査区南壁断面（北から）



3. 玉櫛遺跡 2019-2
調査区西壁断面（東から）





1. 玉櫛遺跡 2020-2
1面完掘状況（東から）



2. 玉櫛遺跡 2020-2
調査区北壁断面（南から）



3. 玉櫛遺跡 2020-1
調査区北壁断面（南から）



1. 東奈良遺跡 2020-1 1面完掘状況 (南から)



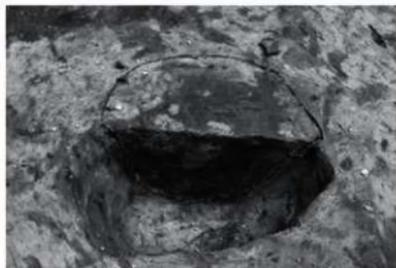
2. 調査区北壁断面 (南から)



3. 1面1溝断面 (北東から)



4. 1面2溝断面 (北から)



5. 1面4小穴断面 (北から)



1. 東奈良遺跡 2020-2 1面完掘状況（北東から）



1. 1主体部 検出状況（北東から）



2. 1主体部 木棺部完掘状況（北東から）



3. 調査区西壁断面（東から）



4. 1主体部の掘込み面（北東から）



5. 墳丘土壌と2溝断面（南から）



1. 1主体部 横断面 (木棺部) (北東から)



2. 1主体部 横断面 (墓坑) (北東から)



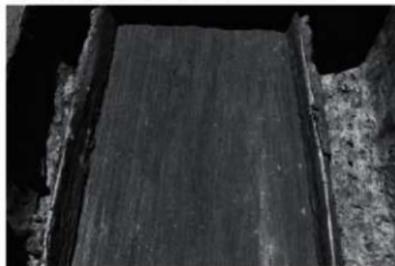
3. 1主体部 縦断面 (木棺部) (北西から)



4. 1主体部 縦断面 (木棺部) (北西から)



5. 1主体部 赤色顔料検出状況 (北東から)



6. 1主体部 墓坑内杭痕跡検出状況 (北東から)



7. 1主体部 墓坑内杭痕跡近景 (北東から)



8. 1主体部 墓坑内杭痕跡近景 (北東から)



1. 1 主体部 南西部側板・小口板検出状況（北東から）



2. 1 主体部 木棺材（底板）



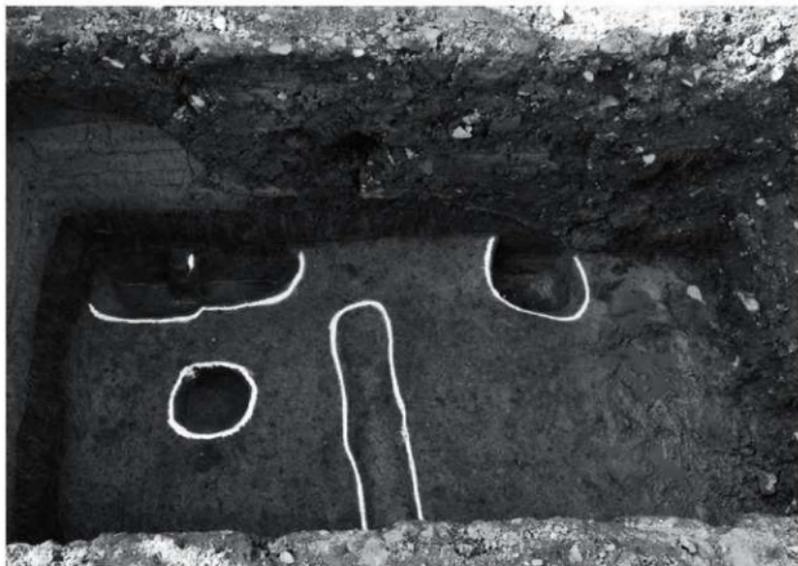
1. 東奈良遺跡 2020-5
調査区西壁断面（東から）



2. 東奈良遺跡 2020-4
調査区西壁断面（東から）



3. 東奈良遺跡 2020-7
調査区北壁断面（南から）



1. 東奈良遺跡 2020-8 1面完掘状況（東から）



2. 調査区西壁断面（東から）



3. 1面4ピット断面（東から）



4. 1面5溝断面（西から）



5. 1面1ピット断面（北から）



1. 鮎川遺跡 2020-1
1面完掘状況（南から）



2. 太田茶白山古墳陪塚群 2020-1
調査区東壁断面（西から）



3. 宿久庄遺跡 2020-2
調査区西壁断面（東から）

報告書抄録

ふりがな	れいのねんどせいばらましまいごうぶんかざいほくつちようさがいほうーれいのねんどごっこほじりぎょうー
書名	令和2年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報ー令和2年度国庫補助事業一
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第80集
編著者	木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567ー8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	令和3年(2021年)3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡2020-2	新庄町	34° 48' 52"	135° 34' 19"	20200623	9㎡	個人住宅 建築工事
茨木遺跡2020-4	片桐町	34° 49' 15"	135° 34' 15"	20201208	6㎡	
上中条遺跡2019-2	上中条一丁目	34° 49' 09"	135° 34' 03"	20200206	4㎡	
春日遺跡2020-1	上穂積二丁目	34° 49' 20"	135° 33' 34"	20200609	2㎡	
春日遺跡2020-2	上穂東町	34° 49' 13"	135° 33' 37"	20200910	5㎡	
牟礼遺跡2019-5	中村町	34° 49' 09"	135° 34' 55"	20200324	6㎡	
牟礼遺跡2020-2	中津町	34° 48' 58"	135° 34' 57"	20201029	5㎡	
玉柳遺跡2019-1	真砂一丁目	34° 48' 01"	135° 34' 28"	20200213	6㎡	
玉柳遺跡2019-2	真砂一丁目	34° 48' 02"	135° 34' 28"	20200214	6㎡	
玉柳遺跡2020-2	真砂一丁目	34° 48' 01"	135° 34' 28"	20200610	6㎡	
玉柳遺跡2020-1	水尾三丁目	34° 48' 11"	135° 34' 29"	20200508	4㎡	
東奈良遺跡2020-1	東奈良二丁目	34° 48' 08"	135° 34' 08"	20200406	4㎡	
東奈良遺跡2020-2	東奈良二丁目	34° 48' 08"	135° 34' 07"	20200422 ～ 20200425	6.4㎡	
東奈良遺跡2020-5	東奈良二丁目	34° 48' 08"	135° 34' 08"	20200720	4㎡	
東奈良遺跡2020-4	沢良宜西二丁目	34° 47' 50"	135° 33' 56"	20200608	6.25㎡	
東奈良遺跡2020-7	沢良宜西二丁目	34° 47' 50"	135° 33' 56"	20201126	6㎡	
東奈良遺跡2020-8	奈良町	34° 48' 27"	135° 34' 01"	20201207	3.9㎡	
鮎川遺跡2020-1	鮎川二丁目	34° 49' 16"	135° 35' 29"	20200410	5㎡	
太田茶臼山古墳陪塚群 2020-1	高田町	34° 50' 45"	135° 34' 50"	20201030	4㎡	
宿久庄遺跡2020-2	宿久庄三丁目	34° 50' 14"	135° 32' 10"	20201221	6㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡2020-2	集落跡	中世	—	土師器、須恵器、黒色土器	
茨木遺跡2020-4	集落跡	中世	—	—	
上中条遺跡2019-2	集落跡	弥生・古墳	—	土師器	
春日遺跡2020-1	集落跡	古墳	—	—	
春日遺跡2020-2	集落跡	古墳	ピット	土師器、瓦器、陶器	
牟礼遺跡2019-5	集落跡	縄文	—	土師器、瓦器	
牟礼遺跡2020-2	集落跡	縄文	—	—	
玉柳遺跡2019-1	集落跡	古墳・平安 ・中世	—	土師器、瓦器、陶器	
玉柳遺跡2019-2	集落跡	古墳・平安 ・中世	—	土師器、瓦器	
玉柳遺跡2020-2	集落跡	古墳・平安 ・中世	—	土師器、瓦器	
玉柳遺跡2020-1	集落跡	古墳・平安 ・中世	—	—	
東奈良遺跡2020-1	集落跡	弥生・古墳	溝、土坑、小穴	弥生土器	
東奈良遺跡2020-2	集落跡	弥生・古墳	木棺墓、溝	弥生土器、須恵器、瓦器、 木製品	弥生時代の木棺墓 を検出
東奈良遺跡2020-5	集落跡	弥生・古墳	溝	弥生土器、瓦器	
東奈良遺跡2020-4	集落跡	弥生・古墳	—	土師器、瓦器	
東奈良遺跡2020-7	集落跡	弥生・古墳	—	—	
東奈良遺跡2020-8	集落跡	弥生・古墳	溝、ピット	土師器、黒色土器	
鮎川遺跡2020-1	集落跡	その他	ピット	土師器、須恵器、黒色土 器、陶磁器	
太田茶臼山古墳陪 塚群2020-1	古墳	古墳	—	須恵器	
宿久庄遺跡2020-2	集落跡	弥生	—	土師器、須恵器	

茨木市文化財資料集 第80集

令和2年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

— 令和2年度国庫補助事業 —

発行日 令和3年(2021年)3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 株式会社トゥユー